

2nd SAKURA SUMMIT
in TAKATOH

第2回さくらサミット in高遠



「桜」によるまちづくりと地域活性化
長野県高遠町

第2回さくらサミットin高遠記録誌

日時

平成元年9月22日(金)

開催地

長野県高遠町

参加者

秋田県角館(かくのだて)町／鈴木幸朗商工観光課係長

福島県三春(みはる)町／志田勉助役

群馬県鬼石(おにし)町／関口茂樹町長

奈良県吉野(よしの)町／辻健一助役

岡山県瀬戸(せと)町／松本弘道町長

鳥取県西伯(さいはく)町／持田和史産業課観光係長

島根県木次(きすき)町／目次理雄助役

愛媛県川内(かわうち)町／大石則之助役

長崎県大村(おおむら)市／一ノ瀬博都市計画係長

宮崎県北郷(きたごう)町／高橋良則町長

長野県高遠(たかとお)町／北原三平町長

司会／安田浄(長野総合情報研究所所長)

オブザーバー／玉井袈裟男(信州大学教授)

／小林義雄(財日本さくらの会理事)

／金井勝利(ぎょうせい中央研究所副所長)

／小熊博(長野県地方課長)

目次

サミット概要	1
開催趣旨	2
式次第	4
発言録	5
歓迎挨拶	7
来賓挨拶	9
各市町村の発言	11
フリートーク	43
提言	63
さくらサミット憲章	72
共同宣言	74
閉会挨拶	75
プレス記事紹介	76

開■催■趣■旨

花といえば「桜」のことをさすほど、「桜」は日本の代表的な花木であり、昔から国民に愛好され、文学・絵画などにも広く取り扱われております。また、各地には多くの名所、名木があり、花見の行事をはじめ「桜」は日本人の生活にも深くかわりをもっており、日本人や国土の一つのシンボリックな存在となっております。

この「桜」をキーワードにした地域づくりを実践している全国の自治体11町村の首長ならびに関係者が集まって昭和63年4月、第1回「さくらサミット」が島根県木次町に於て開催されました。

21世紀まで余すところ10年、世紀末の今、わが国では、ご承知のように国際化、高度情報化、高齢化など複雑多様な社会経済情勢の中にあります。このことは、当然のことながら地方にも大きな影響を及ぼし、今や地方は「試練の時代」を迎えているといっても過言ではありません。

そのような中で、内政上の最重要課題である「ふるさと創生」事業が創設され、国土づくりはいよいよ地域間競争に一層の拍車をかけることになってまいりました。

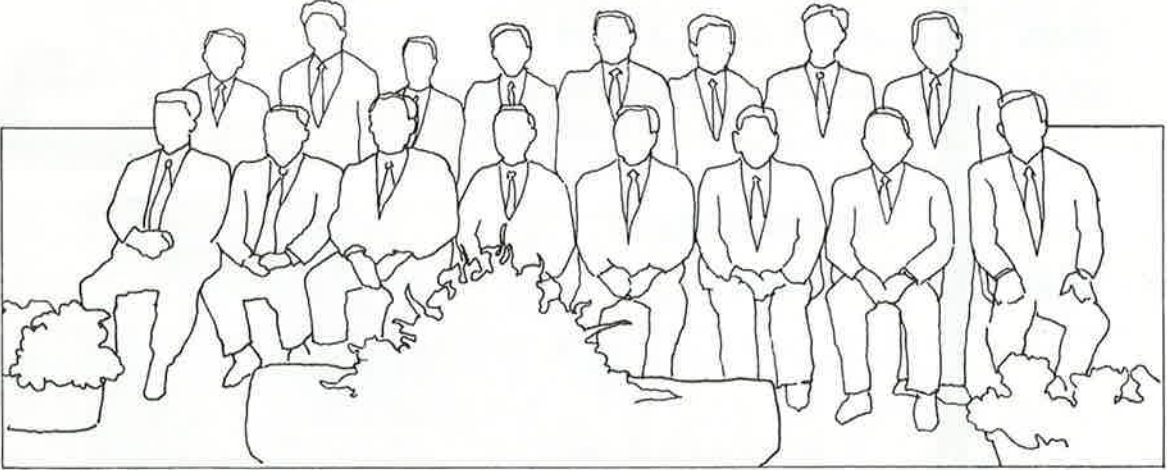
このたび高遠町では、第1回のさくらサミットに続き、地域振興の一環として「第2回さくらサミット」を開催いたします。

第2回さくらサミット基本テーマ
「桜」によるまちづくりと地域活性化



●出席者記念撮影

- 玉井 繁雄 男
信州大学教授
- オブザーバー
(財)日本さくらの会 理事
- 小林 義雄
- 島根県木次町 目次理雄 助役
- 奈良県吉野町 辻健一 助役
- 長崎県大村市 一ノ瀬博都 市計画係長
- 秋田県角館町 鈴木幸朗 商工観光課係長
- 長野県地方課長 小熊 博
- オブザーバー
ぎょうせい中央研究所所長 金井勝利



- 鳥取県西伯町 持田和史 産業課観光係長
- 愛媛県内子町 大石則之 助役
- 宮崎県北郷町 高橋良則 町長
- 司会／長野総合情報研究所所長 安田 淳
- 長野県高遠町 北原三平 町長
- 群馬県鬼石町 関口茂樹 町長
- 岡山県瀬戸町 松本弘道 町長
- 福島県三春町 志田勉 助役

第2回さくらサミット 式■次■第

- 13:09 出席者入場・着席
- 13:10 開会
歓迎挨拶／北原三平高遠町長
来賓挨拶／小熊博長野県地方課長
- 13:20 出席者の紹介
- 13:30 「さくらサミット」企画趣旨並びに経過説明
金井勝利ぎょうせい中央研究所副所長
- 13:35 高遠町まちづくり実践報告
伊東義人高遠町産業課長
- 14:00 高遠町「21世紀への夢 桜からのまちづくり」ビデオ上映
100インチ大型プロジェクター
提供：NEC日本電気ホームエレクトロニクス株式会社
- 14:15 〈コーヒープレイク〉
- 14:25 討議
「さくらからのまちづくり」活性化施策
についての意見交換
- 17:05 オブザーバーによる助言
- 17:25 さくらサミット憲章の制定・発表
さくらサミット第2回共同宣言の発表
さくらサミットシンボルマークの制定
- 17:30 次期開催地首長挨拶
- 17:35 閉会の挨拶

司会／安田 浄
長野 総合情報研究所所長

発■言■録



〔安田 浄〕 皆さん、こんにちは。信州のさくらの名所、高遠町へ、ようこそお出でくださいまして、ありがとうございました。

信州の秋は足早にやってまいりますが、この高遠町の春というのは、かなりゆっくり訪れてくるという感じです。春爛漫といいますと桜を指す、というほどに、桜は日本人の心に深く根ざした花でございまして、自然をめぐる風習というものも、雪月花を中心にすえて、そのいずれもが鑑賞の対象になっております。季節順に追うと、例えば雪見、花見、月見というのがそれであります。特に華やかに咲きほこる美しい桜というのは、専門家のお話をききますと、その土地土地の風土や、あるいは歴史によって、異なるものがあるということでもあります。つまり、育った地域の個性を色濃く映し出すデリケートな花でございまして、それだけに、大変美しいといえるわけでありまして。それぞれの土地に育つ桜は、先人の優しい心と歴史の重みを伝承してくれているようでもあります。春になりますと、細長い日本列島を桜前線が北上するという一方で、季節のオープニングショーを繰り広げるわけでありまして、今は季節が秋で、もみじ前線がこれとは逆に南下するという極めて対照的なところであります。

以前に、高遠町でさくらシンポジウムをやりました時に、ある方がさくらには二つの性格があり、一つは人間の心を鎮める鎮静剤的な効き目と、それからもう一つは、人間の気持ちを高揚させる興奮剤としての作用がある、というお話がございました。開花の時期というのが大変に短いために、誰もがそう思うのですけれども、「もっとさくらに咲いてほしいな」という願望があるので、散る時に、何となくさくらに未練を感じるという感じもいたします。

いずれにせよ、さくらと日本人ということになりますと、かつて戦争時代には「さくらとイカリ」などということで、さくらにとっては大変に迷惑な時期もあったのではないかと思います。今は自然を愛で、平和であることをお互いに喜び、確かめ合うという花になっているようでもあります。ともかくさくらは、私ども日本人の精神的態度、メンタリティと深い関わりをもっているという意味で、これからも大切にしていきたいと思っております。

実は、このさくらサミットの第1回は、島根県の本次町で行われたわけですが、本次町からバトンを受けて、今度は歴史のある信州高遠で開催ということになったわけでございます。それでは只今から、第2回さくらサミットin高遠を開会させていただきます。

歓 ■ 迎 ■ 挨 ■ 拶

高遠町長

北原三平

みなさん、こんにちは。一言、歓迎のご挨拶を申し上げたいと存じます。高遠町長の北原でございます。

昨年、島根県の本次町で第1回のさくらサミットが行われました。今年は第2回を高遠ということで、お引き受けしたわけでありまして。ご承知のとおり、高遠の花見の季節は大変に混雑をいたしますので、「花見の季節以外でよろしいか」とお伺いしたところ、「それはお任せする」ということでありましたので、9月、燈籠祭の今日、開かせていただいたわけでございます。

ちょうどこの季節は、それぞれ自治体が議会をおやりになっている最中でありまして、少し設定を誤ったかなという感じもしているところではありますが、万障お差し繰りいただいて、北は秋田県の角館、南は九州宮崎の北郷町、10の市町村からお集まりいただいたわけでございます。本当にご遠路、この信州高遠までお越しいただきましたことを、心からお礼を申し上げ、ご歓迎を申し上げる次第でございます。

コーディネーターといたしまして、皆さま、すでにお馴染みの安田先生。そしてオブザーバーには信州大学の玉井先生、日本さくらの会の小林先生、長野県地方課長の小熊先生、株式会社ぎょうせいの金井課長さん、それぞれにお願いいたしましたところ、馳せ参じていただきましたこと、厚くお礼申し上げます。次第でございます。

高遠は、中央アルプスと南アルプスに抱かれた、いわば日本の屋根にも等しい高原地帯でございます。この山深い町でありますけれども、しかし将来を展望いたしますと、リニア中央エクスプレスの開通の構想がありまして、そうなればちょうど東京・大阪の中間で、30～40分で東京からも大阪からもやってこられる位置にあるわけでございます。先が大変楽しみに思うところでございます。

昔、田山花袋がこの町を訪れた時に、「高遠は 山すその町古き町 ゆきあう子らの美しき町」と高遠の情景を歌っております。このような静かな歴史の古い城下町でございます。先ほどご覧いただきました城址は、武田信玄が築いた城でございます。江戸時代には、江戸下屋敷を現在の新宿御苑に構えた内藤公の居城でございました。

新都心・新宿は、内藤新宿とも呼ばれておりまして、そんな縁から高遠町と新宿区は友好提携を結んで、現在も大変に深い交流がなされております。この城跡に、廃藩置県の時に、1,500本のコヒガンザクラが植えられました。そして今日にいたっているわけであります。

私どもの町の「さくらからのまちづくり」につきましては、後ほど実践報告の時間をいただいておりますので、ここでは省かさせていただきますが、とにかく町民を挙げて、さくらからのまちづくりを推し進めてまいりたいと考えているところであります。「ルネッサンス高遠」というテーマを掲げまして、現在、町民挙げてのまちづくりの展開がなされております。今回のさくらサミットの模様を、町民の多くの方々に見ていただいて、そして一緒に考えてもらおうということで、今日はサミット参加市町村の皆さま方には失礼かと存じましたが、公開形式のサミットということで企画させていただいたわけでございます。

今日、わが国では、ふるさと創生事業が創設され、全国各地地方自治体でさまざまな取り組みがなされているところであります。また四全総においても、多極分散型の国土形成を全面的に打ち出しており、地方の活性化と自立を図ることが、最重要課題となっております。このような状況の中で、さくらによる地域づくりを模索するためのサミットの開催は、まことに意義深いものがあるかと思っております。

古来より、わが日本国民に愛され続けてきたさくら。このさくらを主人公としたまちおこしを図ろうとしておられる市町村長さん方のご意見を、今日のサミットでお聞きいたしまして、私どもの町が進めております「さくらからのまちづくり」に活かしていきたいと考えているところであります。

本日のサミットが実りあるものになりますよう、お集まりの皆さま方の活発なご意見のご開陳をお願い申し上げますとともに、今後も一層のご協力を賜りまして、さらにこの組織が続きますことを祈念申し上げます。皆さま方のご遠方からのご来町を、重ねて心からご歓迎を申し上げ、まことに意は尽くせませんが、ご挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

〔安田 浄〕 地元高遠町長の北原さんにご挨拶をいただきました。続いてご来賓の方のご挨拶を頂戴したいと思います。

長野県総務部長がお出での予定でございましたが、昨日、急に都合が悪いということで、地方課長の小熊博さんにお出でいただいております。小熊さん、どうぞお願いします。

来 ■ 賓 ■ 挨 ■ 拶

長野県地方課長

小熊 博

今、司会の安田先生からもご紹介がありましたように、県の総務部長がこのサミットに出席する予定でありましたけれども、急用ができましたので、私、県の地方課長が代理出席させていただきますことをあらかじめご了承いただきたいと思います。

第2回のさくらサミットの開催、おめでとうございます。さくらによるまちづくりを目指しているという共通の目標をもった11の市町村が、ここ南アルプスのふもと、しかも歴史の町高遠に一堂に会しまして、さくらをテーマに地域づくりについて意見を交わす、という素晴らしい企画に対しまして敬意を表するとともに、心からお祝い申し上げる次第でございます。また、県外から遠路お越しいただきました市町村の皆さま方には、心から歓迎申し上げます。

さて、先ほどの町長さんのご挨拶の中にもありましたように、近年、東京一極集中への反対の意味での「多極分散型国土」——この言葉が、非常に喧伝されておりました、地域づくりというのが非常に重要な課題になっております。これを言い換えてみますと、それぞれの地域が、その地域がもつ固有の自然・歴史・文化、そういうものを尊重しながら、魅力ある地域づくりをしていくことが必要だ、ということを意味しているように思います。住んでいる人々が本当に誇りをもてるようなまちづくり、地域づくり、そのようなものが今、強く求められているのではないかと思います。

今日、お集まりの市町村の皆さん方の共通のキーワードであります「さくら」。これは日本の代表的な花でもありますけれども、人々の生活の中に非常に深く関わりをもった、「日本人のシンボル」といってもいい花ではないかと思います。ご当地高遠町の千数百本におよびます濃いピンク色のコヒガンザクラ。これが春先には、南アルプスの雪をいただいた連峰を背景に一斉に咲きほこりますけれども、その華麗さは言葉では尽くせないほど鮮やかなものでございます。

高遠町では、この貴重な財産のさくらを中心に、「ルネッサンス高遠運動」を展開いたしまして、いちはやくまちづくり特別対策事業、ないしはふるさと創生1億円事業を活用した地域づくりに取り組んでおりまして、県下121市町村の中でも、地域づくりの先進地とし

て高い評価を得ているところでございます。

本日は、この高遠町の地域づくりを事例として討論がなされるようでございますけれども、今後の地域づくりのあり方について、数多くのアイデアと示唆を、私たちに与えてくれるものと期待しております。どうか皆さま方におかれましても、このさくらサミットからたくさんの収穫をお持ち帰りいただきまして、地域づくりのために、それぞれのお立場からご努力、ご尽力されますことをお願い申し上げます。

終わりに、このサミットの開催にあたりご尽力いただきました方々に、心から敬意を表しますとともに、高遠町、ならびにサミットに参加された市町村の今後のますますのご発展を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。



各市町長の発言

〔安田 浄〕 それでは、サミットにご列席の皆さま方のご紹介を申し上げたいと思います。向かって左のほうから、市町村関係の方をまず最初にご紹介申し上げていきたいと思っています。

秋田県角館町 鈴木幸朗商工観光課桜係長さん

福島県三春町 志田 勉助役さん

群馬県鬼石町 関口茂樹町長さん

奈良県吉野町 辻 健一助役さん

岡山県瀬戸町 松本弘道町長さん

鳥取県西伯町 持田和史産業課観光係長さん

島根県木次町 目次理雄助役さん

愛媛県川内町 大石則之助役さん

長崎県大村市 一ノ瀬博都市計画係長さん

宮崎県北郷町 高橋良則町長さん

そして歓迎のご挨拶をいただきました高遠町 北原三平町長さん

最後のほうでご発言をいただくことになっておりますが、オブザーバーの4人の皆さま方をご紹介いたします。

信州大学教養部教授 玉井袈裟男さん

財団法人日本さくらの会 小林義雄理事さん

それから只今、来賓のご挨拶をいただきました長野県地方課長 小熊 博さん

このさくらサミットの企画及びコーディネートをされましたぎょうせい中央研究所
金井勝利副所長さん

以上の皆さんでございます。

〔ぎょうせい中央研究所・金井勝利副所長〕 ご紹介いただきましたぎょうせいの金井でございます。簡単に経過説明をさせていただきます。先ほど来、お話のございますように、第1回のさくらサミットは島根県の本次町で、去年の4月11日に、本日と同じ11地方自治体の市町村がお集まりになりまして行われました。第1回のテーマは、「さくらによるまちづくりと地域間交流」ということでございます。ちょうど四全総が発表されて、地域間交流が非常に重要な課題として取り上げられたということもございまして、そういうテーマでご議論をいただきました。

その中で、特に目立ったご発言としては、なぜさくらからのまちづくりなのか、なぜさくらなのか、というご意見が出まして、そのへんでかなりつつこんだ討論が行われたわけでございます。この企画そのものは、いわゆる“コンベンション”ということをよく言われますが、情報を持ち寄って、ダイレクトにいろいろな意見交換を行うということが、一つの大きな目的でございます。自治体同士の協力を強めていく場として、考えているわけでございます。

今回、第2回は、先ほどもお話がございましたように、この高遠町で開催していただくことになったわけでございますが、今回は第2回目でございますので、もう少しつつこんだ形で、「さくらからのまちづくりと地域活性化」というテーマで、ご議論を進めていただければありがたいと思っています。

特に、地域活性化の問題は、ご存知のように非常に大きな問題でございますし、ある意味では永遠の課題であるわけでございます。いわゆるインフラストラクチャー、基盤整備の問題であるとか、産業、文化、教育、人づくりというふうな、いろいろと多岐にわたる問題があるかと思えます。今回、あまりさくらに限定しないで、地域活性化の幅広いご議論をお願いできればと考えております。

いずれにしても、地域活性化の基本であります新しい情報を作り出すというか、情報を創造するというふうな場としてこのサミットが有効に活用されれば、大変有意義な会になるのではないかと考えております。今日、ご出席の皆さんの十分なご発言、活発なご討議をお願いしまして、経過報告にいたします。ありがとうございました。

〔安田 浄〕 只今、ぎょうせいの金井副所長さんからお話がありましたような、そういった趣旨のもとに、これからサミットの実質的な運営に入りたいと思います。

それでは日程に従いまして進行させていただきます。高遠町の伊東義人産業課長さんに、

まちづくりの実践報告をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

〔高遠町・伊東義人産業課長〕 ご紹介いただきました産業課長の伊東でございます。

高遠町は、先ほどもありましたように、長野県南部の伊那谷北部に位置しまして、雄大な南アルプスと中央アルプスの山脈に抱かれた、歴史とロマンのただよう城下町です。中央自動車道、西宮線によって中京圏へは2時間、首都東京経済圏へは3時間の距離にあります。

高遠町は古くから豪族が住んでおり、戦国時代から要害の地として知られ、約700年間、高遠城がこの地に築かれておりました。諏訪氏、高遠氏、武田氏、織田氏を経て、徳川幕府となってからは保科氏、鳥居氏の居城となりましたが、元禄4年に内藤氏が領主としてこの地に入国して以来、180年の長期にわたって伊那地方の政治、経済、教育、文化および交通の中心地として繁栄してまいりました。明治4年に、高遠県が置かれていましたが、後に筑摩県となり、明治9年には現在の長野県となりました。また明治8年には、高遠町は県下で最も早く町制がしかれたわけでございます。昭和28年に施行されました町村合併促進法により、昭和31年以来の3次にわたる1町4ヶ村の編入合併を経まして、現在にいたっております。人口8,500人の町でございます。

高遠町は、春は高遠の城址公園をうずめつくす天然記念物のコヒガンザクラ、夏は豊かな大自然、秋は周囲の山々を多彩にいろどる紅葉と、四季を通じての自然環境に恵まれ、先ほども町長のほうから紹介がありましたけれども、「たかとほは 山すその町古き町 ゆきあう子らの美しき町」と、高遠をこよなく愛しました田山花袋先生によって歌われるなど、訪れる多くの人々に親しまれてまいりました。

この高遠城址は、明治4年に廃藩置県が行われまして、高遠城が取り壊されたわけですが、城跡が荒れていくのを町民の方々が憂いまして、明治8年、今から115年ほど前になるわけでございますが、当時の旧藩主が同志を募りまして、さくらの馬場にあったさくらを移植し、その後若い木を植え増やし、老木は土をはり、コモ巻きにしたりして、いろいろと研究をしてさくらを大事に保護してきたわけでございます。昭和35年にはコヒガンザクラの樹林としては、県の天然記念物の指定を受けております。

昭和50年には、町制100年記念事業としてコヒガンザクラを高遠のシンボルに制定しまして、昭和54年には「さくら憲章」を制定しました。そして全町民の力でこのさくらを保護育成し、貴重な財産を後世に伝えることを誓いました。その頃より、すでに町民みんな

でさくらをコミュニティ・アイデンティティとする位置づけが始まってまいりました。昭和61年に、合併30周年を迎えた時、「ルネッサンス高遠」をスローガンに、21世紀に向けて町の活性化について、全国で初めての「さくらシンポジウム」を開き、さくらからのまちづくりへの方向をはっきりと打ち出すことになりました。

それと前後しまして、「若者によるまちづくりの会議」を発足させたり、「明日の高遠を考える会」ができましたり、建設大学校にお願いして地域活性化の診断を行ったり、また昨年は、さくらからの食文化のためのさくらフォーラムを開きまして、さくらをまちづくりに活かす具体的な方策についても研究してまいりました。

ここで、さくらからのまちづくりの具体的な例を、3つに分けて申し上げたいと思います。1つはさくらからのまちづくりについて、町民への呼びかけ。2つ目はイベントによる活性化。3つ目は城址公園のさくらの管理。このようなことから申し上げたいと思います。

まず第1の、さくらからのまちづくりについて町民への呼びかけにつきましては、さくらが町のシンボルであり、これを守り、発展させることが町民の責務であり、誇りであることを理解していただく。

そういう手段としまして、いろいろあるわけですが、近年62年には『朝日新聞』が取り上げました「長野自然100選」に、高遠城址公園が候補となりましたので、この選定をされるように、応募を町民の皆さん方に積極的にPRをすると同時に、町民の意識の高揚と、町民あげて応募に協力いただき、コヒガンザクラと城址公園の知名度アップを図ったわけでございます。その結果、応募数が30万2,106票ということで、第2位になりました。町民の皆さん方のほうからは、7万55人ということで、人口の約9倍、それから友好盟約を結んでおります新宿区の皆さん方から23万1,415票で、この「自然100選」の選定を受けることもできました。

63年は、ご承知のように大河ドラマ『武田信玄』に合わせまして、信玄ゆかりの地として、1年間このイベントを開催して、町民の積極的な参加を求めたわけでございます。

また今年は、さくらの時期を中心に高遠町を訪れる観光客の皆さんに、不愉快・ご不便をおかけしないよう、町民だれもが観光ガイドになれるように、今回は『さくらの高遠』というガイド・ブック5,000部を作り、町民、職員、関係者にお配りして、さくらと城址公園を中心にした町の歴史を認識していただくと同時に、町のイメージアップに努力してまいったわけでございます。

2つ目は、イベントによる活性化についてでございます。毎年、さくらまつりの期間は、

観光客の大勢訪れるこの期間に、いろいろなイベントをやって、全国の皆さんに知っていただくということで、「ミス・コヒガンザクラ」のコンテストであるとか、変わったところではソバ食べ大会であるとか、名物の饅頭食べ大会、それから3,000人の観光客の皆さん方に、商工会の婦人部の皆さんによるさくら湯の接待であるとか、その他63年は、武田信玄のイベントの中で、信玄の側室の湖衣姫の法要であるとか、武田の最期を飾る高遠城の戦いで壮烈な討ち死にをしました仁科五郎盛信公の石像の建立であるとか、また「日本さくらの会」のご協力によりまして、さくらの女王さんにも出ていただいて観光宣伝をしていただきまして、イメージアップを図ってきたわけでございます。

今年は、今まで申し上げましたさくらまつりのイベントの他に、この城址公園が58年に有料化されているわけですが、今年の4月13日に100万人に達したわけでございますので、100万人目の方、そして前後の方への表彰、記念プレゼント等も実施しております。

期間外としましては、絵島まつり、そして絵島まつりの中での町民踊りであるとか、昨年初めて、城下町にふさわしい町民参加による武者行列、そしてジャズフェスティバル、今年はさらに趣向を変えまして大名行列、そしてさらには四国の徳島の阿波踊りを招待するなどしまして、毎年、イベントに新しい目玉をつくって、活性化に努めております。

3つ目は、この後のビデオで上映されるわけですが、城址公園のさくらの管理について、一番大切なことでもあり、一番地味なことでもあるわけですが、今日おみえの小林義雄先生などのご指導をいただきまして、年間のさくら管理の暦などをつくりまして、現在、常時2名のさくら守の方を中心に、土壌の改良であるとか、病害虫の防除、肥料、植栽を進めております。そしてこのコヒガンザクラの苗木を起すことは非常に難しいわけですが、この生産を森林組合や民間の方をお願いして、保護育成にあたっているところでございます。

町の活性化は、「観光立町」、その目玉は「さくらからのまちづくり」、そのためさくらの「規模の拡大」、「さくらの期間の延長」、通年観光を目指しての四季折々の花を楽しめる花の丘の公園、さらにはさくらの屋敷の構想を、財団法人「日本花の会」のご指導により実行に移そうとした時期に、タイミングよく今回の「自ら考え自ら行うふさと創生事業」が打ち出され、高遠町は、さくらからのまちづくりを提唱し進めてきた北原町長の指導のもとに、迷うことなく「さくらからのまちづくり」、「さくらから展開していく美しい心豊かなうるおいのあるまちづくり」を決定することができました。



国際化、高度情報化が進むこれからの社会は、ご承知のように生活が多様化、複雑化されて、目まぐるしい日々の暮らしの中で、ともすれば心が失われがちになるわけでございます。だからこそ、心の豊かさや心の安らぎを求めて、「文化」とか「美しさ」といったものが、これまで以上に観光資源になります。そしてそのような町は、そこに暮らしていく住民にとっても、誇りある素晴らしいふるさとになるはずであります。

まちづくりは、誰かがやってくれるものでは意味がありません。自分がこのまちづくりに加わって、初めて町に愛着がわくわけでございます。そういう人が多ければ多いほど、町は生き生きとして魅力が増します。「さくらから展開していく美しいまちづくり」を進めていく手法として、町民一人ひとりに参加してもらって、自分たちの地域でできる「美しいまちづくり」をみんなで考え、計画し、実行してもらうことを考えております。

高遠町では、昭和52年に、町内を45の地域に分けまして、自分たちのまちづくりを自分たちで考えてもらう「すみよい地域づくりの委員会」という制度を取り入れて、いわば「ふるさと創生」の先取りをしているということで、現在、全地域の委員会に、町的全職員をアドバイザーとして派遣しまして、地域と行政とが一体となったシステムで、行政に寄与していただいております。「すみよい地域づくりの委員会」の組織を活用しまして、美しい

まちづくりを、町のすべての地域で競い合って展開していってもらうことを考えているわけです。町のどこに行っても、四季を通じて、その地に溶け込んで美しい花がさくらとともに咲きほこる、そんなイメージのまちづくりを目指したいと思っております。

そういった地域ごとのまちづくりを、「高遠町全体のまちづくり」として織り上げていくために、花の愛好者を募って、「花の会」という組織もこのほど発会することができました。これらの人たちに、これからは水先案内人になってもらう予定でおります。町ですでに、全地区の老人のグループによる花のまちづくりが始まっていますが、若い人たちにもひとつ、「ふれあい里づくり委員会」といったようなものを組織してもらって、積極的に花のまちづくりに取り組んでいってもらうことを考えております。

高遠町の活性化は、先ほどもふれたように、観光立町でございます。観光に、農業も林業も、商業もうまく結びつけて、その柱としてさくらを中心に「城址公園の規模の拡大」——もっともっと大きく規模を拡大し、それから全国の200余種類のさくらの見本園、それから一年中とぎれることのない、さくらの時期だけでなく通年観光をめざしての花の丘の公園、さくらのことが何でもわかるようなさくら屋敷、「美術館」、「高遠湖への夢の架け橋」など、21世紀にむけて大きな計画をしております。

「花の丘の公園」には、今年の4月、地権者16名の方のご理解によりまして、遊休農用地を活用して3.1ヘクタールに、町民の皆さん300人24団体の人たちに労力奉仕をいただいて、「日本さくらの会」のご好意による1,000本のさくらの若木を植えました。そして先月はこの人たちによりまして、下草刈りも行ってもらったところでございます。こうして新しい公園を、明治からの先人が残してくれました城址公園に負けない公園として、21世紀への贈り物として、町民みんなで造っていきたいと思っております。

通年観光を目指すために、「通過する観光地」から「滞在してもらえる観光地」とするために、いろいろと工夫をしていきたい。現在、都市計画事業の中で、街並みの改造、修景、それから古い歴史、史跡などの結びつけ、さらには来年の10月にオープンいたします「国立少年自然の家」、あたらしい北部のリゾート開発といった、明るい見通しもあります。そして滞在してもらえる観光地としての温泉脈の探査も先日行って、今、その結果を楽しみにしているところでございます。その他、花のまちづくりを進めるため、広い視野に立った花づくりをめざしまして、先月、ヨーロッパの花のまちづくりの視察に、議会の議長さんをはじめ職員を派遣して、ヨーロッパの花がその住民の生活に溶け込んでいる様子も勉強してまいりました。

最後に、さくらからのまちづくりを成功させるために、本日の「全国さくらサミット」、また「さくらフォーラム」、また国内外の関係者——特にアメリカの著名な植物学者でございますローランド・ジェファーソンさんなどをお招きいたしまして、来年の4月19日・20日に開催する「国際さくらシンポジウム」などと、多彩なさくらのイベントを行って、町民の燃えるような情熱の結集と、外に向かつてのアピール、そしてさくらに関する人的・物的交流を図ってまいりたいと思います。この機会を通じまして、先進地の皆さん方のご指導、ご協力をたまわりたいと存じます。

〔安田 浄〕 高遠町の伊東義人産業課長さんにお話しいただきました。今、お聞きしておりますと、この高遠町の場合には、言うまでもなく大変厚みのある歴史、それに伝統が積み重ねられてきておりまして、これを21世紀への非常に大きなプレゼントとして後世にさらに発展させて伝えていきたい、という意欲満々のご披露がございました。そして町民参加、あるいはさまざまなイベント、さらにはいわゆる新しい城址公園と申しましょうか、これに加えて花の丘公園とか、花の資料館、もしくは屋敷(館)、こういったことを非常に深くお考えでございます。

そのように、自ら努力する者に対してはいわゆる追い風があるようで、グッドタイミングで『朝日新聞』の「自然100選」では30万2,000票という投票があったということであり、それには友好提携の新宿のご協力があったとか。さらにもう一つは、ふるさと創生の1億円という思いがけないお金が入った。それを、さくらにこだわるまちづくりのために使っていこうということでありまして、来年の4月19日・20日には、今度は国際的なさくらシンポジウムをやろう、と。まさに国際化の時代の先頭をきるようなお話でございました。

この後、フリートーキングのところでは、いろいろとこれを基盤にしてお話し合いをいただこうと考えております。

只今から、サミットにご参加の10の自治体の皆さま方に、それぞれ10分ずつ、わか町のさくらをめぐるまちおこし、地域づくりということにつきまして、お話しいただきたいと思ひます。

先ほどご紹介いたしました北のほうからのご順でご発言願ひたいと思ひております。本来は、紅葉前線だったら北のほうからですが、さくらだから本当は南のほうからやりたいと思うのですけれども、そういう仕掛けになっておりますので、その点をご了解いただきたいと思います。

まずは秋田県角館町の鈴木幸朗商工観光課桜係長さんをお願いいたします。角館町は、「桜係」というのがあるわけでありまして、そちらの係長さんのお話をよろしく願ひいたします。

〔角館町・鈴木幸朗商工観光課桜係長〕 秋田県角館町からまいりました鈴木でございます。まず、トップバッターということで、気負わずに出壘することを考えて、大きいものを狙わずにお話ししたいと思ひます。

まず私どものところは、冬の間、2メートルぐらいの雪が積もります。その雪解けを待つて、春にさくら、桃、れんぎょうなどが一斉に咲き出します。他の土地と違って、一年の始まりがさくらから始まるような感じがいたしますものですから、私どもは「躍動のさくら」というような感じで受け止めております。

それからもう1つは、私の町は400年ほどの歴史をもつ小さな藩でございます。佐竹北家でございますが、そこの殿様が京都よりお姫さまをお嫁さんにいたたいております。その時にもってきたシダレザクラ3本がひこばえとなって、現在育っている状態でございます。

それと私の町は、さくらで国の指定を受けているものが3つございます。1つは昭和49年10月9日、武家屋敷のシダレザクラ153本が国の天然記念物に指定されております。それから50年2月18日、檜木内川堤のさくら、ソメイヨシノでございます。現在、406本ございますが、2キロの花のトンネルで、これが国の名勝指定になっております。それから51年2月26日には、樺細工——これはベニヤマザクラを使っている町の伝統工芸品で、これが国の伝統的工芸品の指定を受けております。

以上、全国でもさくらの名所は多いと思ひますが、このように国指定を3つも受けているさくらをもっている自治体は、おそらくわか町以外にはないのではないかと、いう自負がございます。私たちはこれを「さくらの三冠王」と呼んでおります。春はピンクのさくら、夏は新緑のさくら、秋は紅葉のさくら、冬は真っ白な雪のさくらで、四季を通じてさくらを楽しめるということもございます。

「桜係」とはどういうことをしているのか、桜係の主な仕事についてご説明いたしたいと思ひます。桜管理事業として5つほどございますが、檜木内川堤のさくら、武家屋敷のシダレザクラの保護管理でございます。枯れ枝、テングス病の除去には、NTTと東北電力の協力を得まして、高所作業車をお借りして、枯れ枝やテングス病の撤去をしております。病虫害の消毒、それから施肥でございますけれども、施肥には地元の中学生を使ひまして、

郷土愛とふるさと学習の一環として協力していただいております。それからソメイヨシノの補植、有害鳥獣などの駆除、それからさくらの苗木プレゼントを行っております。これは、私どもは56年にふるさと文化振興計画を策定いたしまして、58年度よりさくらの苗木プレゼントを行っております。春は進入学児童、秋には出生、結婚、金婚、家の新改築に、さくらの苗木をプレゼントしております。さくらの本数は、現在25万本ほどになっておりまして、西暦2001年までにこれを40万本にしようということで進めております。また昨年、民間の団体で「全山さくらの会」という名称の団体ができまして、周囲の山々にベニヤマザクラを植栽して、これを樺細工の原料にして、「見るさくら」と「つくるさくら」の両方を楽しもうという運動になってきておりますので、2001年にならないうちに40万本が達成できるのではないかという気もしております。

桜係のもう一つの仕事は、ベニヤマザクラの植栽でございます。これは樺細工という伝統工芸品の原料確保のために、昭和48年度より国の補助を受けまして、毎年1万5,000本ずつ、5ヘクタールずつ植栽しております。これを、もう7年間続ける予定でございますが、現在、これが24万本ほどになってきました。85ヘクタールの土地に植栽しておりますが、これは営林所、国有林と、財産区、民地をお借りして植栽しております。また、これに伴った樺細工伝統工芸展を毎年行っております。他に研修事業としては、この高遠町や、青森の弘前などに研修に行っております。

桜係としては、このような仕事を一年を通しておこなっているわけでございます。

観光客は、年間を通して130万人ほどまいります。そのうち、4月25日頃から5月6日までがさくら祭期間中でございます。ゴールデンウィークにかかりますもので、まず50万人ほどのさくらの観光客でにぎわいます。あとは9月7日から9日までの秋のお祭に20万ほど。それから6月の新緑の武家屋敷とか、10月の紅葉の時などを通して、年間130万人ほどの観光客がみえております。

以上、簡単にご説明申し上げましたが、トップバッターとして、このへんで終わらせていただきます。

〔安田 浄〕 秋田県の角館というと、私も地図で調べたのですが、田沢湖の南西部ということでしょうか。

〔角館町・鈴木幸朗〕 はい。新幹線の終点、森岡駅から田沢湖線をご利用いただきまし

て59分で角館につきます。

〔安田 浄〕 今、お話をお聞きすると現状で25万本ですね。そして21世紀の冒頭にはこれを40万本にしようということですが、それ以前に、40万本を達成できそうですか。

〔角館町・鈴木幸朗〕 そうですね。先ほどもお話しましたが、「全山さくらの会」という会もできましたので、2001年を待たずしてできるのではないかという感じもしております。

〔安田 浄〕 それから、ベニヤマザクラの件ですが、これは植栽がすでに24万本済んでいるわけですか。

〔角館町・鈴木幸朗〕 はい。今年の分をいれまして24万本でございます。

〔安田 浄〕 それはさくらの木の皮を利用した物産化ということですね。

〔角館町・鈴木幸朗〕 そうでございます。そちらにも飾ってございますけれども、ヤマザクラの皮を使った工芸品でございます。

〔安田 浄〕 あとで物産化のことだとか、イベント化のことを伺いたいと思うのですが、それにしても4月25日から5月6日まで、ゴールデンウィークに50万人というと、相当な混雑でしょう。それは悩みではありませんか。

〔角館・鈴木幸朗〕 まず駐車場とトイレの悩みが一番大きいです。

〔安田 浄〕 少々時間が余りましたので、予定にはない質問をさせていただきました。どうもありがとうございました。また後で伺います。

続いては、福島県三春町の志田勉助役さんにおいでいただいております。三春町というと、郡山市に接する町ということで、よろしゅうございましょうか。それではどうぞよろしく願います。

〔三春町・志田 勉助役〕 三春町の助役の志田でございます。それでは、町紹介およびさくらのまちづくりについてお話し申し上げたいと思います。

只今、ご紹介がございましたように、わが町は福島県の中央に位置しておりまして、郡山に隣接する町でございます。もう皆さま、すでにご案内のように、伊達政宗の正室のめご姫の誕生地でもございます。また自由民権運動の河野広中先生を生んだ土地でもございまして、うめ・もも・さくらが一緒に咲き、それで「三春」ということでございます。

本町の産業につきましては、葉たばこと養蚕が主でございます。最近にいたりましては、やはりテクノポリスのゾーンになっておりまして、定住構想のためのコーポラティブの住宅とかホープ計画を実施しております。公園都市ということで、歴史公園都市・三春、「三春の里構想」によりまして、着々実現を図っているところでございます。

観光といたしましては、小さな城下町でございますので、三春町には神社仏閣が非常にたくさんございます。東北の鎌倉とも言われている土地でございます。町には歴史民俗資料館というものがございまして、非常にたくさんの方が訪れております。

しかし、何と申しまして、その中では春のさくらの季節でございます。その代表とされますのが、樹齢1,000年以上、そして根元の周囲が10メートル50センチ、また枝の広がりが東西に約22メートル、南北に17メートル。国の天然記念物でございます。また、日本の三大さくらの一つと言われております。ベニシダレの滝桜でございます。また本町には、ベニシダレのさくらが非常に多うございます。各神社仏閣につきまして、約1,400本ほどございます。これらは「さくらマップ」を作りまして、訪れる人にこれを持っていってもらって、観賞していただくようにやっております。

また、民芸品といたしましては、三春藩の事業として、べこ屋敷がございます。三春駒をはじめといたしまして、多くの和紙のべこ人形の里でもございます。また、三春町ではこの町の事業をやるために、三春町のまちづくり協議会と、町内の7地区がございましてこの7地区の中で地区単位にまちづくり協会を設置いたしまして、町民総参加による自治活動地域づくりを行っております。人づくりの面では、建築科グループとか住宅研究会とか、農業青年会とか農民塾とか、商業のための商業塾とか経営塾などが、それぞれの目的をもって活動しております。

また国際都市では、姉妹都市にアメリカのウィスコンシン州のライスレイクと交流をしております。

また大型事業による町の整備は、平成6年に完成いたします三春ダムの建設を目下進め

ております。この三春ダムの建設やその周辺の整備については、さくらを主とした公園づくりをやっていききたいということで、さっそく去年から初めております。また平成7年には、福島で国体をもたれることになっておりますから、東北横断道、さくらの横断道としての計画を今、練っているところでございます。

それからさくらの里づくりの構想でございますが、三春町には約5,900本ほどのさくらがございます。先ほど述べました大型事業の一つである三春ダムの建設事業、この周辺整備の一環といたしまして、さくらの里づくりがでございます。これは先ほども申しました天然記念物である滝桜を核として、ダム周辺のさくら植栽をメインに、町内全域にさくらの里づくりを進める予定でございます。もう、すでに計画は、できあがっております。また、この事業を進めるために、昨年の4月には関係団体等のご協力、ご援助によりまして、さくらのシンポジウムを本町で開催いたしましたところでございます。

同時に、三春町には「三春町さくらの会」というものを結成いたしております。町内の各種団体が構成されておりますけれども、会員はだいたい四百数名で、これによりまして着々とさくらの植栽を進めております。

また昨年秋には、「日本さくらの会」のご協力をいただきまして、ダム工事予定地周辺の三春町さくら公園に1,500本ほどのさくらを植樹いたしました。今年の秋にも1,500本を植樹しようということで、計画をすすめているところでございます。

また、この「さくらの里整備事業」を実施するにあたりまして、さくらの会結成とあわせまして、「三春町さくら基金条例」というものを制定いたしました。行政の力だけでなく町民の力をはじめ、広く全国各地のさくら愛好家などから募金を賜っております。現在、1,064件、1,200万ほどの基金がございます。

先ほど、司会者のほうからご紹介がございましたように、今回、国が打ち出した「ふるさと創生事業」の1億円につきましても、町民などのアンケート、また1億円の使い道についての協議をいたしました。その結果、8,000万円は「さくらの里づくり」のためのさくら募金に、そして2,000万円を三春駒とべこ屋敷等、非常に繁盛しております三春人形を展示するための「みちのく人形館整備事業」にあてることにいたしております。

わが三春町の「さくらの里づくり」は、まだ緒についたばかりでございますけれども、伝統ある滝桜を核といたしまして、現在、町内各地に点在する数多くのベニシダレを中心にしながら進めていきたいという考えでございます。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

続いて3人目の方は、群馬県鬼石町の関口茂樹町長さんです。それでは、よろしく願いいたします。

〔鬼石町・関口茂樹町長〕 私は、群馬県の鬼石町からやってまいりました町長の関口でございます。「鬼」と「石」で、なかなか変わった町名ですが、「おにしまち」と読んでおります。私の町は、ちょうど本町高遠の3分の1ぐらいの大きさであります。52.68平方キロ、人口はほぼ同じで約9,000人の、小さな山間の地であります。

これからの高齢化社会などを考えますと、私の町でも65歳以上の方が現在17%であります。小さい町であります、いろいろな経緯がありまして、小さな町立病院をもっております。その病院は、今までは経営などで大変な赤字がありまして、町のお荷物だったのですが、むしろそのやり方が悪いのではないかとということで、地域医療計画にどうにか間に合い、また地元の医師会の賛成を得まして、医療の充実もしっかり行い、町の健康づくりの拠点にしていこうということを進めている町であります。

また、最近はずいぶん多くなったようですが、私の町も外国青年の招致事業をやっており、現在2年目になっております。小さな町ですから、アメリカから一人の若い女の先生が来ておりますが、小学校・中学校を中心に、英会話などを一生懸命やってもらい、英語を通じて国際感覚なども身につけてほしいと考えております。この外国青年の招致事業はずっと続けていこうということで、町の合意になっております。

今度の「ふるさと創生事業」などでも、どうもうちの町は一匹オオカミ的な人がいて、町のコンセンサスなどを——私の力不足もあるのですが——取りつけにくい感じがいたします。数年前に読んだのですが、ソニーの名誉会長の井深大が、「幼稚園では遅すぎる。0歳からの母親作戦」など、幼児教育に非常な関心をお持ちで、ソニーでは幼児開発事業部というものをつくって、積極的に幼児の能力について研究をしております。そこで、このふるさと創生資金の一部を、ソニーのトークンカードを使って、町の事業として行い、赤ちゃんが生まれるとすぐ、良質な刺激を与えて、将来気がついてみると、その人の能力が少しでも広がるようにしようという試みを行っております。これは、ふるさと創生にふさわしい事業ではないかということで、議会の賛成を得ました。小さいうちから、また大きくなれば外人の先生などを通じまして、英語の力を徹底的につけてもらうような、そんな政策を町としてやっていこうということで、今、進んでいるところであります。

また、地域振興につきましては、先ほども申し上げましたような町民性がありますので、誇りのもてるまちづくりをやっていこうじゃないかと考えています。それにはどうしたらいいのかというと、やはり町の宝を再発見して、そしてそれらを整備保存していこうということで、今、鬼石町では、県立の桜山森林公園と、ふるさとづくり特別対策事業、この二つを核に、いろいろな諸事業を行っている最中でございます。

実は、私の町のさくらは、県立の桜山公園と非常に深い関係があります。桜山公園が今、45〜50ヘクタールの規模で整備を行っております。海拔600メートルの山であります。その頂上部分が、約5ヘクタールあり、そこに11月から12月にかけて5,000本の冬ザクラが咲きます。これは昭和12年に、国の天然記念物の指定を受けたのですが、日露戦争の戦勝祝いということで、その集落の人たちが桜山の頂上に植えたもので、その中に冬ザクラが混じっていたようであります。何本か咲くということはどこでもあるのだそうですが、1か所に、そのように多くの冬ザクラが咲くことはきわめて珍しいということで、先ほども申し上げましたとおり昭和12年に、国の天然記念物の指定を受けております。

私の町では、「さくらだけではちょっと物足りない」という意見がありますが、実はもう一つ、国の天然記念物の指定を受けているものがあります。昭和32年に、一億数千年前の姿を今に伝える三波石峽というのがありまして、約1.5キロが国の指定を受けております。大きな石がゴロゴロしております。庭石として非常に珍重されている石であります。

私の町の石の売上は、推定ですが年商で70億とも70億とも言われております。小さな町でも400の業者がひしめいております。昨今のいろいろな社会の変化から、単に庭石だけを売るのはなく、造園技術とあいまって石を売っていこうということになっております。この県立公園にも、石をふんだんに使った庭園を造ったらどうかと、県にお願いし、「さくらと石の庭園」ということで、今、桜山の整備をしております。

この桜山などを中心にさらに整備を進めまして、「首都圏3,000万人の憩いの地に」をキャッチフレーズに、今、一生懸命やっているのですが、やってみますとなかなか難しいところがありますが、お蔭をもちまして今、3年事業のちょうど真ん中でありまして。平成3年の4月に開園できるように、今、頑張っているのですが、どうにかこうにか予定通り進んでおります。ぜひ、チャンスがありましたら、私の町のほうにもお出でいただきたいと思います。

先ほども、こちらの高遠の町のスライドや、現にいろいろと見させていただきましたが、私の町ははるかに遅れておりまして、本当にこれから、という駆け出しの町であります。

今までは、先輩も一生懸命努力したのですが、ハード面の事業をするのが精一杯でありました。しかしながら「ふるさと創生事業」とか、県立桜山森林公園の建設とか、「ふるさとづくり特別対策事業」など、事業がかなり目白押しでありまして、何とかこういう先進地を勉強させていただき、一つでも二つでも学んで、これからのふるさとづくり、誇りのもてるまちづくりを目指してまいりたい、というのが本当のところでございます。今日のサミットを通じまして、何とか町民の皆さんの期待に応えなくてはということで、勉強にまいりました。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

群馬県の鬼石町は、藤岡市の南、埼玉県境にある町ということでございます。

それでは4人目の方をご紹介します。もう、さくらといえばこの町、というぐらいでございます。奈良県吉野町の辻健一助役さんがお出ででございます。吉野町は、県のほぼ中央部に存在している町でございます。どうぞ、お願いします。

〔吉野町・辻 健一助役〕 吉野町の辻でございます。只今、吉野町のさくらについて、大変な言葉をいただいたわけでございますが、実際のところ、吉野町自体はさくらの上にあぐらをかいている、という状態です。さくらについて、行政としてタッチしている部門というのはほとんどない。ふるさと創生の話も出ておりますけれども、吉野町としても、「いつまでもこういう状態でいてもいいのか」と、「これから、何とか、もっとさくらを表に出して行政を進めていく必要があるのではなかろうか」ということで、今日はここに寄せていただきました。いろいろと各自治体のご意見を聞かせていただいて、勉強させていただきたいと思っている次第でございます。

吉野町と申しますと、奈良県の中心部になるわけでございます。奈良と大阪は接しております。奈良の北部は大阪のベッドタウンとして人口が急増しています。そして南のほうになりますと、吉野がその玄関口になるわけですが、そこからは山になりまして過疎が進んでいる。特急で、大阪の中心部から1時間10分ぐらいかかる距離になるわけですが、人口の流出で過疎化が進んでいるというのが、今の状況でございます。

吉野町の産業は大きく分けまして、一つは吉野杉・桧の集積地としての木材関係の産業が大きな中心を占めています。昔、吉野川——和歌山に入りまして紀之川になるわけでございます——を使って、筏流しをやっておりました。

もう一つは、観光も中心になります。これがさくらの吉野山ということになるわけでご

ざいます。さくらの吉野山と申しますと、面積的にいえば吉野町全体の1割、それも吉野町の南の一角を占めている地域でございます。なぜこのように全国で、さくらとして有名になってきたかと申しますと、これは長い歴史があるようでございます。

今から約1,300年前に、山岳宗教と深い関わりがあるわけですが、吉野から尾根づたいに20キロほど奥に入りますと、三条ヶ嶽という大峯山という行場がございます。それは役の小角という方が開いたそうですが、千日修行をやっている時に蔵王権現が現れ、そのお護り本尊としてさくらの木に刻んだ、という。その蔵王権現を金峯山寺にお祀りしております。そういう関係で、さくらの木というのは御神木だということで、蔵王権現に参拝される方々は、それぞれ寄進するということで木を植えられた。またお金をたくさんもっている方は——これは資料として残っていますが——1万本ほど植樹されたという記録もございます。

そういうことで、宗教との関わりが深くある。それもいつ頃からかと申しますと、『万葉集』にはさくらは出てこないのですが、西暦900年ぐらいにつくられた『古今和歌集』には、すでに歌が載っています。多分その頃には、山にさくらが植えられていたということになるかと思います。その後、西行法師が吉野に庵を設けました。その頃に、いろいろな讃歌集の中に吉野のさくらを歌った歌がたくさんでているので、もうその頃には、さくらがいっぱい咲いていたのではなかろうかと想像されるわけでございます。

そしてその後、この地域には、さくらとともに蔵王権現を中心に寺院が数百あったという話ですが、そのように山岳仏教のメッカとしての建物もいろいろあったということでございます。1336年頃に、後醍醐天皇が南朝の都を吉野山に求められて、50年あまりおられたということもあります。そしてその後、豊臣秀吉太閤の花見ということで、5,000人ほどの方がみえて花見をされたという。それ以来、ずっと、花の吉野として全国に知れわたっているということかと思えます。

今、その吉野山でさくらが植えられている面積は32ヘクタールでございます。このあたりは昭和11年に吉野熊野国立公園に指定されております。奈良県吉野公園にも指定されております。そして史跡名勝ということで、32ヘクタールのうち国有地が19ヘクタール、そして地元の観光関係業者の方が吉野山保存会というのをつくられておりますが、その所有が13ヘクタールということで、それぞれ下刈りや管理をしておられるという状況です。

この吉野山のさくらの数でございますが、50年ほど前に一度調べたとき、その当時は周り1尺以上の木が6万本あったという。それ以下の部分も入れますと、約10万本くらいの

さくらの木ではなかろうかということでございます。神社仏閣が山の尾根のところに建っておりまして、さくらは谷川に植えられています。花の下での花見という状況ではなく、逆に、尾根から谷底のほうを見るという状況でございます。花は4月10日から下、中、上、奥と4ブロックに分かれまして、約20日間ぐらい咲き続けています。

全国に知られた花を、今後、この短い期間を、どうやって年間を通じて活用できるか。そしてこの知名度を、吉野町のためにどのように利用できるかということが、これからの課題だと考えている次第でございます。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

それでは続いて、岡山県瀬戸町の松本弘道町長さんをお願いします。全国に「瀬戸」というところは何か所ぐらいございますか。

〔瀬戸町・松本弘道町長〕 3か所ございまして、一つは愛知県の瀬戸市、あとは愛媛県知多半島の真ん中へんに瀬戸町というのがございます。

〔安田 浄〕 それではよろしくをお願いします。

〔瀬戸町・松本弘道町長〕 ご紹介いただきました岡山県瀬戸町の町長の松本でございます。

私は、この高遠町に昨晚泊りまして、今日の朝、9時頃から1時間ぐらいかけて町の中を見せていただきました。非常に歴史と伝統の町という感じが、非常にうらやましかったのでございます。私どものところは、そういうものが全然ありませんで、非常に悲しい思いをしている状態でございます。

まず位置を申しますと、岡山市から山陽線で大阪のほうに向かって4つ目の駅でございます。昔は2つ目の駅でございましたが、人口が増えましたもので駅の数も途中で増えたということでございます。そして町の中に、万富という駅と瀬戸という駅と二つございます。これは全国でも少ないのではないかと思います。そしてもう一つは、吉井川という川が流れておりまして、吉井川を渡っている山陽線の鉄橋が曲がっているわけです。カーブしているわけです。それもちょっとめずらしいもので、全国で2か所ぐらいしかないそうです。これは内田百閒という作家が、『阿呆列車』という随筆を書いておりますけれども、



その中にも出てまいります。

またもう一つ面白いのが、まあ、情け無い話なのですが、吉井川の川の真ん中までしか、橋がついていないというところがあります。どうも、まことに申し訳ございませんが、そういうふうな町でございます。ただ、ちょっと誇りにしたいのは、県立の高等学校が二つと、もう一つは職業訓練校と消防学校がございます。そして今年から短大を誘致いたしまして1校できております。

たまたま、さくらにつきましては、実は宗堂寺という場所がございまして、お寺のあるところでございますが、そこに「宗堂桜」というのが咲いているわけです。その内容・名称などにつきましては、この前のサミットの時にうちの公民課長がお話ししたと思いますので申し上げますが、地名がついたさくらの名前というのはめずらしいので、私も学名は何かと研究いたしました。オブザーバーとしてご出席の小林先生にもお尋ねしたのですが、ドイツ語の難しい名前がよく覚えられないので、先ほどもお話し申し上げたら「それは『宗堂桜』でいいですよ」ということでもございました。

さくらの花びらが反転いたしておりまして、八重でございます。非常にめずらしいということで、そのさくらを植えて、繁殖させているわけです。いろいろと歴史的ないわれが

ついておりまして、岡山県の方は見にいっしやる方が多い。従来、そういう物語的なさくらですので、その土地の人が門外不出ということにしている。私が少しさくらをPRしようかと言った時には、「そんなことをしてもらっては困る」と言っていたのでございます。近年になりまして、その話がずいぶん盛り上がりまして、それではよそへ出してもいい、苗をつくってもいいと、だんだん繁殖して、宗堂桜を広げようという感覚になりつつある、というのが現状でございます。

しかしながら、このさくらは、先ほども小林先生とお話したのですが、植えかえたり接ぎ木をしたりしてよその土地に植えますと、育ちが悪いわけでございます。町といたしましては、それでもしょうがないということで、今現在はそれもやりますが、他のいろいろなさくらを少し植えてみよう、さくらの種類を集めているわけでございます。集めた場所といいますと、宗堂というところを一つのポイントにいたしまして、そこはもちろんですが、運動公園が24ヘクタールありますので、その中に今、2,000本ほど植えております。それから瀬戸の町の近くに公園がございまして、そこに200〜300本。それから三谷という公園にも植えております。それから吉井川を眺める保木というところがございまして、その公園にも200〜300本植えています。

今はまだまだ、緒についた程度のものでして、皆さま方に申し上げるようなことはないわけです。これからの継続といたしましては、吉井川がございまして、リバーフロント計画といいますか、最近建設省の方も河川公園などの整備について力を添えてあげようというお話もありますので、建設省の河川工事事務所の方とも相談して、「リバーフロント計画」というものを立てております。そしてさくら堤を造ろうと考えております。それから30%ほど山がありますので、その山の中の環境保全林整備をいたしまして、種々の木を植えるとともにさくらの木も植えていこうという考えもございます。

今日は「ぎょうせい」の方がオブザーバーで来ていらっしゃいますが、こちらにある程度委託しようということになりまして、その中で、町のイメージづくりの「さくら」というもの——色とか花とか香りとかというものを、どのように位置づけていくとか、それからガードレールとか案内板とか、いろいろなカラーといったものの材料にさくらを使うということを少し検討していただきたい。例えば、それはCI全体の問題ではございませんけれども、その中で「さくら」というものの位置づけをどういうふうにするか。町全体のイメージアップを図るための手段として、一つ考えていただきたいということを申し上げたいと思います。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

それでは次の方は、鳥取県の西伯町の持田和史産業課観光係長さんをお願いします。西伯町というのは、地図で見ますと米子市の南、島根県に接する町というご紹介でよろしいでしょうか。それではお願いいたします。

〔西伯町・持田和史産業課観光係長〕 ご紹介をいただきました鳥取県西伯町の観光係の持田でございます。西伯町は、鳥取県の西部に位置しまして、西は島根県境、東は伯耆富士と呼ばれます大山、あるいは北のほうは米子市に接しております。

さくらの名所と申しますと、西伯町の中心でございます法勝寺公園のさくらです。さくらは約5,000本あります。昭和35年頃からボランティアによりまして植栽が始まったということでございます。今では、山陰有数のさくらの名所ということで、町内外の観光客でにぎわっております。また夜には、ぼんぼりの明かりが法勝寺川に映りまして、神秘的な様相を見せております。また、さくら祭にあわせて、町のイベントであります一式飾りというものが公開されます。この一式飾りと申しますのは、家庭の日用品を使いまして、一種類のもので作品をつくりあげるものでございます。例えば、箸なら箸、茶碗なら茶碗、皿なら皿で、動物、あるいは歌舞伎の芝居、あるいは人物、風景、最近ではテレビなどに出てくる主人公がつくられています。これは全国的にも珍しくて、江戸時代から伝わった庶民の伝統芸術です。それにあわせて神幸式もさくらを盛り上げるということで、神社の氏子の武者行列などで無病息災なども願っております。

また、新しいさくらの名所といたしまして、今年度、賀祥ダム、通称緑水湖が完成いたしました。緑水湖というのは、20年の歳月をかけて完成したわけで、その周辺の土地約4キロに、さくら1,000本、ツツジ500本、もみじ500本を植栽いたしました。この周辺につきましては、森林公園、あるいはレイクサイドアリーナ、体育館、管理センター、総合運動公園などの諸施設を備えておりまして、鳥取県の憩いの場所、あるいは総合レクリエーションをめざしているところでございます。

近年は、各集落、各地区で、さくらの植栽が広がっておりまして、数年先には町全体がさくらで包まれるのではないかと考えております。

〔安田 浄〕 今、お聞きしていると、大変にめずらしい行事、伝統的な民俗芸能とでも申しますか、一式飾り。例えばどんなものが珍しかったですか。こういうものを使って、

こういう飾りをつくったと、何かご記憶があったらお願いします。

〔西伯町・持田和史〕 今年つくりましたのが勸進帳です。漆の重箱というか、そういうものを利用して、背は人間ぐらいの約1メートル50～60センチのものをつくりました。それから特に、今回目立ったのは、鷹ですね。鷹を唐津焼でつくってあった。50センチぐらいで少し小さかったのですが、そういうものが約30点ほど出展されました。

〔安田 浄〕 それはなかなか有名でしょう。

〔西伯町・持田和史〕 全国で1、2例しかないそうです。

〔安田 浄〕 それと、今度はさくらを組み合わせようというわけですね。どうもありがとうございました。

続いては島根県の木次町・目次理雄助役さんにおいでいただいております。木次は、この前の第1回のさくらシンポジウムの会場でありました。木次町というのは、宍道湖の南というご紹介でよろしいでしょうか。

〔木次町・目次理雄助役〕 はい。出雲の南、雲南と申しております。

〔安田 浄〕 どちらで呼ばれるのがいいですか。出雲の南と、宍道湖の南と。

〔木次町・目次理雄〕 通称雲南地方と申しております。

〔安田 浄〕 では出雲の南ですね。出雲の南、木次町の目次助役さん、どうぞ。

〔木次町・目次理雄〕 島根県木次町からまいりました目次でございます。よろしくお願ひ申し上げます。昨年は僭越でございましたが、第1回のさくらサミットを開催させていただきました。その節はご参加いただきました各代表の方々、また「ぎょうせい」の皆さん方にはひとかたならぬご協力を賜りました。私のほうから申し上げるのもおこがましいと思いますが、成功裡に終わったと評価しております。この場を借りまして、厚くお礼を

申し上げます。ありがとうございました。

早いものでございまして、昨年から約1年半が経過しております。時代も、昭和から平成へとかわっております。あの時に教えていただきましたことで、さくら事業を進めさせていただいているわけですが、前回も、木次町の地理的なことについてはご説明しておりますが、若干、おさらいという意味で申し上げたいと思います。先ほど、コーディネーターの安田先生からご紹介いただきましたように、皆さん方もご存知だと思いますが、島根県では湖が二つございまして、宍道湖、中海というのがございます。宍道湖から広島の方に向かって、中国山脈のほうへ入ったところでございます。約20キロぐらい入ったところ、と表現させていただきたいと思います。中国山地から流れ出す斐伊川の中間部に発生しました町でございます。

以前は商業が中心でしたが、最近私どもも御多分に漏れず過疎指定町村でございまして、企業誘致をさかんに進めましたところ、どういうわけか非常に人気がよくしゅうございまして、たくさん進出していただきました。県内町村では、いちやく予定地を完売いたしました。現在、操業していただいているところがたくさんありますし、将来もご進出いただく計画もございます。工業出荷額にいたしましても、51町村でございますが、確か2番であったと私は記憶しております。

こういうところで、どうしてさくらか、ということですが、62年に町の振興計画をつくりました。21世紀を目指しての振興計画を策定するという時に、何かシンボルを設けたいというところでした。

横道にそれますが、本町はさくらが約4,000本ございます。一番大きな集積地は、先ほども申し上げました斐伊川の右岸側に、約1,200本。大阪の造幣局のさくらトンネルとまでは申しませんが——あそこは確か八重ざくらだったと思いますが——私どものところはソメイヨシノが右岸の両側に植わっておりまして、トンネルの形式をなしております。自称中国随一と——瀬戸町さん、あるいは西伯町さんがおみえになっていきますので、「うちも中国一だ」とおっしゃるかもしれませんが、トンネル形式になっているものでは私どもが中国一と考えているわけでございます。その他、若干の公園ですが、高遠町さんのお城跡があるとか、由緒あるお寺さんなどはあまりございません。

先ほど申し上げました町の計画で、さくらを中心にすると申し上げましたが、大きな目標は「さくら咲く健康のまち・木次町」という目標を掲げておりますので、その一角として「健康の森構想」を今現在、進めているところでございます。これは生活環境保全林と



いうことで、ここに約1,400~1,500本を植栽してございます。これもおいおい開花しているところでございます。

そういうことで本町は、土手のさくらをもとにして、木次町からさくらを切っては、町の活性化はありえないのではないか、ではさくらを表に出してやろうではないか、ということ考えたわけでございます。話は大きくしたほうがよからうということで、日本一のさくらの町づくりとして、大きく打ち出しまして、去年はさくらサミットなどをお引き受けしたわけでございます。

何でさくらの日本一かということでございますが、今、一生懸命考えているところでございます。先ほど来、角館町さん、あるいは三春町さん、それから吉野町さん等々に、数では当然、及びもつきません。それからブランドといいますか、コヒガンザクラとか宗堂桜とか、名前のあるさくらもございません。皆さんと同じようなものを植えているだけでございます。今からどういうふうな日本一にしようかと、模索しているところでございます。

とりあえず21世紀までには5万本——数で日本一というわけにはまいりませんが、いちおう5万本を植えようと考えております。これにつきましても、私どもの開花時期が、だ

いたい4月の初旬で、8日から10日頃の間で開花し、ソメイヨシノが多いので、パツと咲いてパツと散るという形態でございます。これを少しでも長くもたせようということで、その5万本の種類も、いろいろとアドバイスをいただいて、約一月ぐらいはもたせるような方向で——多少の標高差もございますから——いろいろな種類のさくらの木を植えようと考えているところであります。

現在、植栽しているところですが、隣にいらっしゃいます愛媛県の川内町さんとはさくらのとりもつ縁で、私どもは姉妹町村の縁結びをさせていただいております。こちらはさくらの苗を生産していらっしゃいますので、陽光という種目の苗をお分けいただきまして、これらの植栽を進めているところでございます。

昨年、さくらサミットの時に、高遠の北原町長さんのほうから、「これではこちらのさくらはかわいそうだ」というご指摘をいただきました。現在、私どももさくら係の話もいたしました。が、体制的にはなかなか難しい段階です。幸い、島根大学農学部吉野先生という——何か、さくらに因んだお名前でございますが、この方に昨年、約2,000本近くでございましたが、桜台帳を作っていただきました。「これはどういう病気になっている」とか「どこをどうすれば、もっと元気になるのではないか」という診断もいただきました。現在、その診断に基づいて施肥、あるいはまわりの草取り、あるいは散水などの事業を進めているところでございます。

今後は、日本一のさくらのまちづくりを目指しまして、さくらの花だけではなくて、先ほども角館町さんからもお話しがありましたように、何かさくらの木を利用した産業的な発展、ただ見て終わるというだけではなく、材料としての利用もできないだろうか。あるいは、こちらでは花のお茶とかお粥などもやっていらっしゃいますので、これらを参考にさせていただきまして、そういう産業の面でも活かすことはできないかと考えているところでございます。

意を尽くしますが、また後ほど、ご質問などでもあればお答えし、ご説明申し上げたいと思います。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

今、木次町の目次助役さんからお話ございましたが、今度はお隣の愛媛県川内町の大石則之助役さんをお願いしたいと思います。川内町というのは、松山市の南東というふうに申し上げてよろしいでしょうか。そうすると、だいたいの皆さんのイメージが出てくる

と思います。

〔川内町・大石則之助役〕 そうですね。松山から東にだいたい12~13キロ離れたところ
です。ご存知かもしれませんが、道後温泉というのが松山にあるわけです。愛媛県温泉郡
川内町ということになるのです。よそから来られて、温泉郡川内町と聞いて「あんなところ
に温泉はないじゃないか。なんで温泉郡というのか」とご不審がられるのですが、昔は
川内町と同じように、温泉郡に道後村というのがあったわけですが、松山市にとられてしま
いまして郡名だけが残った形でございます。

川内町は、山間部になっているわけです。川内町とさくらとの関係といいますと、今を
さる300年前頃に、川内町から隣の郡境を越えた12キロの間に、時の松山藩主が植樹をされ
たわけです。そのさくらをもとにいたしまして、「川内町はさくら」という形で、周囲から
目が向けられたわけでございます。300年このかた、ずっと20年ぐらい前までは、現在の国
道11号線の前身の街道の沿道にずっと見えていたわけですが、寄る年波には勝てません
で、20年の間にほとんど枯れてしまいました。現在2本残っているわけですが、1本は幹周
りが1.8メートル、もう1本は2.1メートルです。樹種は「江戸彼岸桜」と専門家は言っ
ているわけです。それらは記念物に指定されています。

その後、川内町の町民も、さくらに対する関心が非常に強くて、各地の林道その他に、
毎年、奉仕で植樹をしてまいりました。しかしながら戦前までは山も非常に広葉樹林でご
ざいました。その中にヤマザクラが点々とありまして、新芽のふく頃には、本当に錦絵を
見るような、全山紅葉という中でさくらでしたから、非常に美しい景色でした。けれど
も戦後の復興景気になりまして、全山が針葉樹に変わりました。したがって野性のヤマザ
クラも姿を消してしまった。林道あたりに植えてあったさくらも、すべてが民地でござい
ました。民地植えだったために、針葉樹が太ってきて、それに押されてしまった。20年、
30年、やっとさくらのトンネルができた、山に行くのが楽しみだな、という時になってか
ら、針葉樹に押されてしまって枯れてしまう。そういうことで、その当時には、30年ぐら
い前に植えたさくらはほとんどなくなってしまいました。

そういうことで、20年前に、それなら仕方がないから、1戸あたり1本を植えてもら
うということになり、2年にわたって各戸に苗を1本ずつ配りました。植えてはくれまし
たけれども、10年ぐらいたちますと、枝は繁茂しますし葉は落ちるし、ヒゲ虫には泣かさ
れるということで、1本1本なくなり、現在、ほとんど姿を消してしまいました。

そういうことを繰り返してきたわけですが、これではいけないということで、ここ
15~16年前から、拠点づくりをしようということに切り替えたわけです。ちょうど500
メートルほどの県立自然公園の山がありますが、その頂上にもって行って7町歩ほどの町
有地をつくりました。そこにさくらの苗木を年々植えてまいりまして、現在2,300本ほどに
なりました。ようやく下から花が見えだしたという状態でございます。

ちょうど昨年、生活環境保全林の指定を受けまして、県のほうで、その地帯一帯の
40町ほどを、さくらをキーにして樹種改良をしているわけです。来年で終わるわけですが、
その中にさくらを主体として、その他に、それぞれ小鳥の好むような樹木を植えたり、下
には灌木、つばき、さざんか、しゃくなげ、あじさいというものを植えていくような樹種
転換を、今現在進めているわけでありまして。

そういうことで、その一帯40ヘクタールを、さくらをもとにいたしました町民の森、町
民いこいの健康の森ということで、造成いたしております。先ほどからお話がありますよ
うに、今度の創生事業につきましても、それを主眼にしたいと計画を進めております。ご
案内のように四国は島でございますけれども、一昨年、岡山から坂出が1本の鉄路で結ば
れまして、島ではなくなりました。したがって四国も高速時代を迎えました。川内まで、平
成5年には縦貫道ができるわけで、川内にインターができます。ちょうどインターから見
上げたところに、今現在造成している山があるわけです。川内町の一つのシンボルとして、
その山を造成していこうと意気込んでいるわけです。

もう一つは、河川敷、河川空間の利用ということです。これも非常に難しいことござ
いまして、建設省あたりは桜堤とか何とかと環境整備を進めておりますが、県はなかなか
河川利用を承知してくれません。そういうことでございますが、黙って2.3キロのところに
約2,300本のさくらを植えました。現在は、それも管理しているわけです。そうしますと、
これは松山から川内へ入ってくる11号線の両サイドの河川敷でございますので、川内町の
玄関口としての環境整備ができるということで、さくらを植えているわけでございます。

植えているさくらは、ほとんどがソメイヨシノでございます。以前に、ツバキカンザク
ラとかいうさくらも植えてみましたが、開花が3月初旬ですので、何か肌寒い、寒々とし
た中にさくらが咲いているというのは、見ていても寒い気持ちが出て、さくらというイメ
ージが起きないわけです。それではいかんということで、それも樹種転換をいたしまして、
ソメイヨシノだけにしようということを進めています。

先ほど木次町さんが言われました陽光ですが、川内町は「全国をさくらの中に埋めよう」

というようなさくらのマニアがおりまして、陽光は登録品種の第一号だそうです。中国やあるいはローマのイワノフ2世に贈ったということで、世界にも苗木を贈っているようなマニアがいるのです。そういう方の指導も受けながら、さくらを植えているわけです。

そういうわけで、川内町もこれからでございます。先ほども申しましたように、川内にも平成5年には高速道路ができる。四国の夜明けでありますとともに、さくらでも開化をもとめていこうと考えております。それを活かした町民の健康づくりにも意気込んで取り組んでいるわけでございます。今日は、皆さん方のお話を参考にさせていただきたいと、学びにまいりました。よろしくお願いいたします。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

それでは長崎県の大村市——今回ご参加の、ただ一つの市ということになりますが、一ノ瀬博都市計画係長さんをお願いします。大村市というのは、長崎県のほぼ中央で、大村湾に臨むというご紹介でよろしいですね。よろしくお願いいたします。

〔大村市・一ノ瀬 博都市計画係長〕 只今、ご紹介を受けました一ノ瀬でございます。私たちの大村市は、今、ご説明のとおり長崎県のほぼ中央に位置しております。背後には多良岳県立公園、前面は大村湾を臨む、風光明媚なところでございます。海上には、全国で初めての海上空港、長崎空港がございまして、中国定期便も通っている状況でございます。

歴史的にいいますと、高遠の町と同じように城下町でございます。大村市といいますのは、大村藩の城下町でした。戦前は軍都としてさかえ、東洋一の21海軍空廠がございました。現在は人口が7万2,000人ですが、その時もそれに近い人口があったようです。

17年に市制施行をいたしまして、来年の3月には九州横断高速道路という、福岡から長崎まで直行でつながる高速道路が貫通いたします。福岡、大分、熊本など近県から、かなりの観光客がみえるのではないかと期待しております。

さくらについてでございますが、私どもの大村市のさくらに関しましては、大村公園の中にある串間城址——大村藩主の城跡でございますが、そこに明治17年に東京から八重ざくらを旧藩主が取り寄せまして、そこに植えたのが最初だといわれております。そのなかのサトザクラの中に、八重ざくらの萼数が10枚から、花卉の多いものでは約200枚になるものがあります。その八重ざくらを、昭和42年に、国の天然記念物に指定していただき

まして「オオムラザクラ」と学名をつけています。それともう一つ、その串間城址の串間ざくらも、42年に県の指定を受けて、現在、花見客でにぎわっております。大村公園の中には、オオムラザクラが約300本、串間ざくらが約200本、公園全体の中には、ソメイヨシノを入れまして約2,000本のさくらを植えております。

私どもの市は、現在、通過型の市でございます。お客さんがなかなか滞在してくれませんが、それでも、さくら祭の期間——3月20日ぐらいから6月半ばまでやるわけですが、一番最初に、さくら祭のトップをきってソメイヨシノが咲き、オオムラザクラ、あるいは串間ざくらが咲いて、約50万人程度のお客さんに6月までに来ていただいています。

オオムラザクラ、串間ざくらが過ぎますと、ツツジが約10万本、そして西日本一をほこると宣伝しているのですが、花しょうぶ園をつくっております。一番最初につくったのが昭和34年です。それから現在まで、約10万株。この花ショウブ園をつくっておりますので、だいたい花ショウブがすむ6月までは、大村公園——約21ヘクタールで狭いところなのです——は花見客で混雑しております。

高速道路、あるいは空港ができまして、産業としては、今からリンク型企业、ハイテク産業に力を入れていこうではないかということで、努力しております。

まちづくり事業で二級河川が市のほぼ中央を流れているのです。高遠みたいな大きな川ではなく、川幅80メートルぐらいです。その両岸に約500本を、昨年度から5ヵ年かけて、河畔公園としてまちづくり事業をやっております。

それから先ほどもご説明がありましたが、さくらを全市にちりばめて植えるということもちょっとできないのですが、各公園事業で、その公園の中の拠点づくりとして、さくらを必ず植えていくという考えています。

それからさくらの保存ですが、市民団体ではつくっておりませんので、大村公園のすぐ近くに県立の園芸高校がありますので、その園芸高校の研究グループでオオムラザクラの保存、育養、研究につとめていただいております。昨年は、さくらの会から優良団体として表彰をいただいたような状況です。そのように、園芸高校の先生方と協力しあって、われわれも天然記念物のオオムラザクラを殖やしていきたいと頑張っているわけです。

そういうことで、さくらに関してはあまり産業はないのですが、花いっぱいの中でトップをきるさくらを大事にしていく。あるいは天然記念物のオオムラザクラを保存して、お客さんを呼ぼうではないかと頑張っております。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

さて、いよいよ最後の町のご登場ということになります。九州宮崎県の北郷町の高橋良則町長さんに、発言のしめくりをお願いしたいと思います。北郷町というのは宮崎市、日南市などに接する町ということでよろしゅうございますか。では、よろしく願いいたします。

〔北郷町・高橋良則町長〕 九州の南の果ての北郷町から来た高橋でございます。只今、ご紹介をいただきましたように、北郷町というのは日南市のすぐ隣です。北のほう宮崎市、西のほう都城市に囲まれた山岳地帯なのです。行政区はばかに広いのですが、明治10年の西南の役に西郷軍についたということで、民有地を引き上げられて、国有林が非常に多く、1万6,000ヘクタールの山の中に、1万2,000ヘクタールの国有林があります。

私のところは、さくらとしては歴史的なものは何もございません。ちょうど帯のところは伊藤藩の城下町なのですが、そこにお城があって、私のほうには関所があったのです。朝鮮征伐の時には、豊臣秀吉の論考交渉の段階で3万4,000~5,000石の力しかないのに、5万石の申告をしたということで、後で非常に財政難に陥り、人工造林が始まったのです。

杉の人工造林というのは、非常に古い400年ぐらいの歴史をもっているのです。しかも温暖多雨で、非常に早く太るということで、昔はほとんど全国の漁船の船材は私のところでつくっていた。ところが今は、船材は鉄鋼やプラスチックに変わった。現在はわずかに韓国輸出をしている程度で、帯林所の全盛時代はたいしたものだったのですが、今はすたれてきました。

そういう状況の中で、町制を敷いた時には9,800人ぐらいの人口があったのですが、現在は6,000人そこそこです。これは奥地に国有林が非常に多くあるために、近代化が進むにしたがって働く場所を失ったということです。5,500人ぐらいにまで人口削減が起こったところなのです。あわてて工場導入をやって、今、やっと少しずつ増えて6,000人台になった。

不思議なもので、私の町では、長野県の飯田市のほうから野沢菜のつけもの工場に来てもらっています。私のところは温暖多雨で、冬でも野沢菜がつかれることから、冬にそれを原料として飯田市に送っているのです。

こういう林業の町だったのですが、ちょうど55年頃に、今までの経済林追求の林業から、人の心をいやす林業へ変えたらどうかということで、私はさくらの植林を主張したの

です。これを、本当に長期計画に盛ったのは、57年の第三次総合計画で、さくらのまちづくりということをはじめたのです。

それがたまたま、四全総計画でリゾート開発ということが進められてきて、宮崎県も福島県、三重県と一緒に、いの一番にリゾート開発の指定を受けたのです。私の町も、ちょうど日南国定海岸公園に接する県立公園ということで、その重点開発地域に約500~600ヘクタールが含まれることになったのです。私どもも、何とか新しい時代に即した三種産業の導入ということで、以前から話は進めていたのですが、全町公園化というのを57年から進めてきたわけです。

そこで、リゾートということで、去年の島根県の本次町のさくらサミットに、ぜひ勉強したいと思って参加しました。本次町の歴史のあるさくらのトンネルを見せていただき、いろいろな歴史的なものを見せていただき、そして帰りに吉野町の視察にも行きました。そして私どもも、いよいよその指定を、昨年7月に受けました。これを具体化しないといけないので、9月からリゾートの基本計画作成にかかり、3月によりやく完成したわけです。

今度は、さくらを私どものリゾート開発の彩りに使わせていただきたいと考え、計画を立てました。基本計画が終わりましたので、今は実施計画を策定している段階でございます。今まで私たちが温泉を開発してきたところで、今度は、これに広渡川に12ヘクタールの河川敷がありますので、そこを開発していこうという計画でございます。

それから今度のリゾート計画の一番の主たるものとして、民間第3セクターで開発する地帯になっているのですが、この蜂之巣公園というのは、すでに昨年、整備を終わりました。今度はその上の、今まで牧場をつくっていたところにゴルフ場をつくっていく。その上のほうの16ヘクタールに、今まで8、9年かかってさくらを植えてきたさくら公園があるわけです。これは、日本さくら協会の指導を受けて、8種類を移植しました。これを、先ほども話が出ましたように、ふるさと創生の資金の一部をこれにあてて、整備をやりたいという考えでございます。

それから私のところに伊藤藩の関所がありましたので、もとの関所を復元しようという町の単独計画です。ちょうど隣には猪八重溪谷のたくさんの滝があります。世界でも有名なコケの産地であります。ヨーロッパの学生が日本にやってきますと、たいていここにコケの調査に来る。そういうところがありますので、これの整備もあわせて、ここを整備していきたい。

そして広渡ダムをつくりましたので、ここにさくら公園を、お客を招致しながらやっていこうという考えでございます。県のほうは、来年度で治水が完了いたしますので、建設省とダムサイド整備事業の話を進めてもらっている状況です。

私どもが、さくらのまちづくり構想を出しましたので、県のほうも、さくら街道としてつくってくれるということで、今進めております。これらは、本当に今度のサミットで勉強させていただきましたことで、厚くお礼を申し上げます。



フリートーク

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。地元の高遠町から始まりまして、1市10町のそれぞれの代表の方々から、具体的なお話をいただきました。ちょうど時間が4時でございます。これから1時間はフリートーキングということになるのですが、それぞれの自治体でお話いただいたことの中で、重要だと思われることについて、少し確認をしていきたいと思います。

今も、北郷町の高橋町長さんからお話がありましたが、経済の追求から、人の心をいやすような施策を展開しなければならないのではないか、ということで昭和57年から総合計画をつくり、さくらのまちづくりと申しましょうか、「チェリータウン構想」というものを打ち出してこられたということです。おそらくこの市町村においても、さくらに着目されて取り組んでこられた背景には、やはり物やお金の追求ということだけではなく、人々の心の安らぎのようなもの、あるいは人々の心にうるおいをもたらすようなものを、一つまちづくりの中核にすえて、それでイメージアップを図っていききたい、という意図が、それぞれの自治体の本当の心の底にはあるのではないかと思うわけです。

これも、ご順にご発言をいただきたいと思います。まず最初に、角館町の鈴木さんに伺いたいのですが、やはりさくらに取り組む気持ちのようなものは、先ほどもお話しいただいたのですが、この部分に関してお話ししたいと思います。

〔角館町・鈴木幸朗〕 私どもの町では、「見るさくら」と「作るさくら」の両方で売り出しています。あと、この9月30日には、商工会婦人部の事業で、さくらアイランドというものをやっているのですが、その20周年ということで、さくらに関して資料展をやる予定です。

ですから私のほうは、見るさくらと、作るさくら（工芸品）で売り出していきたいと思っています。

〔安田 浄〕 次に三春町の志田助役さんにお伺いしたいのですが、だいたい「三春」と

というのは、うめとももとさくらということですが、やはり力の入るものはさくらということになりますか。

〔三春町・志田 勉〕 それぞれに、うめ、もも、さくらが同時に咲くぐらいの環境でありますので、それぞれ特色はあるわけですが、やはり滝桜という中心のさくらがございまして、「さくらの里づくり」をやろうということになったわけです。

〔安田 浄〕 町民の皆さんの「さくらの里づくり」に寄せる気持ちはどうだと思えになりますか。

〔三春町・志田 勉〕 私どものほうでは、ふるさと創生論の場合もそうですが、だいたい21世紀の町民のライフスタイルをどうとらえるかという議論になりました。これは、いろいろなグループがございまして、例えばホープ計画の中での建築研究会のメンバーとか、商業関係の人たちの経営塾や、農民塾など、いろいろなライフスタイルがどうあるべきなのか、という議論をしております。

そういう中で、各地域に地域づくりの協議会がございます。町単位で地区のまちづくり協会という自主的な協会があるのですが、そういう中で、一つひとつ固めたものが、そういう結果になったのです。

〔安田 浄〕 そうしますと、それぞれの地区の委員会でまとめてきたものを、町としての全体的な構想としてとらえ、それをフィードバックさせて、その中で基本計画のようなものをつくっているということですね。

〔三春町・志田 勉〕 そういう中で、ふるさと創生論も、またたく間に10ぐらいのものが出たのです。一番真先に出て、一番の合意を見たというのが、「さくら基金」であったわけです。

〔安田 浄〕 これは8,000万円を投入したということですね。

三春町のさくらの会の会長さんの志木原さんがおいでになっていらっしゃると思いますので、1、2分で、民間の立場でそういう運動をおやりになっているお考えに、ふれていただき

たいと思います。

〔三春町・志木原さくらの会会長〕 先ほど報告にございましたように、昨年、シンポジウムの直後、商工会、婦人会、青年会等々32の団体が発起人となりまして、「さくらの会」を結成したわけでございます。会員は町長をはじめ町3役、議会議員全員、一般町民すべてが含まれております。

特に第1回目の事業としましては、年間2回ほど会報を発行いたしまして、会員相互の親睦とさくらの情報交換をしております。

それから滝桜を中心としまして、三春にはさくらの名木、樹林が、どの程度あるのかの調査をいたしました。これは行政の末端組織である隣組を通じて全戸を、そしてさくらの会は神社仏閣などを担当しまして、さくらの樹木調査書——さくらの品種7種類その他、さくらの現状、樹齢、樹高、特徴等々を含めまして調査いたしました。その結果、全町に10年以上、50年以上、100年以上のさくらが5,835本という結果が出たわけです。

さらにまた年間2回、さくらの会全員をもちまして、さくらの里の先進地の検証視察をしております。運営の概況はその程度でございます。

〔安田 浄〕 ふるさと創生の1億円のうち8,000万円を、ポンとさくらに注ぎ込むということを町民が合意したということは、よほどさくらに寄せる気持ちが強いということですね。

〔三春町・志木原〕 はい。それから年一回の総会は、さくらの山で開催するのです。そしてさくらの総会終了後は、全員でもってさくらの下草刈りをやります。そこでは、あまり接触のない方々とも、鎌を使う中で、非常に人間関係が良好になる。それから滝桜を中心にしまして、さくらに対する愛着はすごいものがあるのです。ちょっと、他では感じられないものがあるのです。

〔安田 浄〕 今、さくらの山で総会をやって、その後に一杯やるのかと思ったら、下草刈りをするんですね。どうも参考になりました。ありがとうございました。

それから高遠町では、先ほど、さくらの会がもう発足しましたということですが。

〔高遠町・北原三平〕 さくらの会というか、もっと大きく「花の会」というのです。さくらにこだわる、さくらのまちづくりであります。しかしもっと広くとらえて、「花の町」にしたらどうか。春はさくら、さくら以外の時期にはさまざまな花をもとめて、ということです。それで先ほど、産業課長からのご報告申し上げましたように、それではヨーロッパの先進地はどのような取り組みをしているかを視察するため、議長を団長に、職員の指導を含めて、先日も10日ほど、フランス、オランダ、ベルギーを回ってきたところです。

ですから、高遠は、先ほどからお話し申し上げているように、さくらにこだわったまちづくりですが、さらにそれを本物にするためには、みんなが花を愛する心を育てなければいけない。それには「花の会」というものを結成してやっていこう、というわけでございます。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

先ほど、群馬県鬼石町の関口町長さんが、今まではどちらかというとハード面を先行してやってきたけれども、これからはやはりソフト面へかなり重点を移して、誇りのもてるまちづくりをしていきたい、とおっしゃいました。その、「誇りのもてる」ということとさくらとのつながりを、もう少々お話し願えればと思います。

〔鬼石町・関口茂樹〕 私の町の冬桜ですが、これは白いピンク色をしています。やや小ぶりのものですが、これは冬に咲いて、さらに同じ木で春も咲くのです。しかしこのさくらは、昭和43年にさくら山が大火にあいまして、ほとんど全滅したのです。それから、地元にはさくら山保存会があるのですが、その保存会が中心になって、こつこつ増やしていった。そして今日、どうにかこうにか、まずまずの成木になってきた。

そういう経緯がありますから、それらの努力を町民一人ひとりがしっかり知る、そしてさらに育てていく。鬼石町の人よりも外部の人のほうが、冬桜の可憐な味わいを非常に高く評価してくれます。そういうことで、それを立派にやるということが、結局は「私たちの町は素晴らしいものをもっているんだな」という誇りにつながるのではないかと思います。

したがって現在、鬼石町は、さくら山の整備をとにかく急務としています。道路の整備をはじめ、600メートルの山ですが、大型の観光バスで上って、さくらを十分に堪能してお帰りいただく。こういうことをやることによって、大勢の人が来る。それがまた、やる気

を起こす。そしてそれが町民の誇りにもつながるであろうし、またそうでなければならないと考えています。

〔安田 浄〕 吉野町の辻助役さんにお伺いしたのですが、いったんは山岳宗教というか修験道があり、おそらく歴史的にみるとこれが衰退する中で、さくらもだめになってきた、というお話ですが、参拝客が寄進をしたり、あるいは多少お金持ちの人が1万本の植樹をしたりということで、民間の協力もいただいているということですが。

〔吉野町・辻 健一〕 最近は、宗教色というのはほとんどなくなりましたが、やはり以前はさくらを、ご神木ということで、参拝の人がそれぞれ途中で買った苗木を植えて帰ったという状況がございました。

先ほど、角館町のほうでは、さくらを細工で使うという話がありましたが、吉野では、さくらの木を切ることは人の首を切る、枝を切るのは腕を切るというような、昔の言い伝えも残っております。植えた木にはいっさい手を加えない。下刈りをする程度の状況でございます。

現在の管理ですが、補植をしている程度で、現状維持ということになります。吉野山では補植をし、それは吉野山の保勝会が苗木をつくり、そこが中心になってやっています。ロータリークラブが木を植えたり、あるいは吉野山の小学校の生徒がさくらんぼを集めて、その種を保勝会が苗木に育て、それをまた吉野山に植える。そういう形での管理のやり方でございます。

〔安田 浄〕 吉野山の国立公園に指定されているところは、国有地が19ヘクタールで、保存会が13ヘクタール。これは双方で、管理は十分なのですか。

〔吉野町・辻 健一〕 現にやっているのは、吉野のさくらシロヤマザクラが約90%で、これは非常に強い木でございますので、下刈り程度の管理しかしていないということです。

〔安田 浄〕 もう一つ伺いたいのですが、吉野町の場合には、あまりさくらにこだわらなくても、歴史的な文化財のようなものが他にたくさんある。何も資源のないところに分けてあげたいぐらいあるのではないですか。

〔吉野町・辻 健一〕 それは、まことにありがたいことなのですが、重要文化財、国宝を合わせまして、今、吉野町で67件ございます。それから県指定の文化財が17件ございますので、84件の文化財を保有しているということでございます。

そして、今、吉野山はさくら、あるいは神社仏閣ということになるのですが、もう少し吉野川の上流のほうにまいりますと、宮滝というところがありまして、これは持統天皇が飛鳥時代の離宮として使われていた跡だということです。持統天皇時代には、11年間に33回ほど、飛鳥の離宮に来られていたということもあります。天武天皇が旗挙げされましたのは、吉野町の葛へいったん来られて、そこから壬申の乱の旗あげをされたという土地も残っております。

吉野町は全体として、そういう歴史文化は豊富であると思います。その分、やはりさくらに対する評価も、町民としては意識が低くなるのではなかろうか、ということはあるわけでございます。

〔安田 浄〕 行政側としては、やはりさくらというものを、町民の皆さんに十分、「大事なものだ」と存在を認識していただくようなはたらきかけというのはどうですか。

〔吉野町・辻 健一〕 現状で考えますと、吉野のさくらというのは観光産業の一つだというとらえ方をしております。観光産業としてつかまえた場合、さくらの時期というのは非常に短ございます。年間を通じて、何とかこれを観光産業に役立てたいということで、先ほども話がありましたが、花いっぱい運動をしたり、吉野山でも若干、あじさいを植えたり、そういうことはやっております。

町民全体としては、さくらに対しての評価はしております。これは全国的に名が売れていますし、吉野町の町民としては、誇りの一つだと思うわけですが、さて、生活の糧としてはどうかという点になりますと、やはり杉、桧です。吉野町の8割ほどは森林ですが、そのほとんどは人工林になっております。生活面、経済面でいえば、杉、桧のほうに重点がいくような感じでございます。

〔安田 浄〕 わかりました。どうもありがとうございました。

それでは私の隣の、瀬戸町の松本町長さんにお伺いしたいのですが、先ほど、リバーフロント計画というようなものがあって、さくら堤をつくっていききたいということでありま

したが、私がここで特にお伺いしたいと思うのは、コミュニティアイデンティティ、つまり地域統一イメージをつくっていくという戦略の中にさくらをすえて、色とか香りとか、花というものを、町のカラーにしていきたいとおっしゃる。このへんのことについて、少々お考えを述べていただきたいと思います。

〔瀬戸町・松本弘道〕 おっしゃるとおりの考え方ですが、それを具体的にどうやるかというのは、ここにおみえの「ぎょうせい」に委託して、お願いしてあるのです。そしてこの1年、相談してやりましょう、ということになったのです。

〔安田 浄〕 まとまるのは、だいたいいつ頃ですか。来年のサミットに間に合いそうですか。

〔瀬戸町・松本弘道〕 はい。来年の3月ぐらいの予定です。そうすれば、発表できると思います。

〔安田 浄〕 そうすると、町長さんは、今度は胸を張って「私どものところでは、さくらを中心にしたCIを展開しております」と、来年はやれますね。

それでは今度は中国地方の、岡山県と隣あわせの西伯町の持田さんにお伺いします。先ほどは、一式飾のお話を伺ったのですが、だいぶ大きな工場があるのですね。

〔西伯町・持田和史〕 グリコという工場もございますし、ミツマタフレッシュという工場もございます。

〔安田 浄〕 そういう工場に勤めていらっしゃる方たちも、やはり西伯町の「花のある町」というのは夢があつていいだろうという期待があると思いますが、どうでしょうか。

〔西伯町・持田和史〕 あると思います。

〔安田 浄〕 それと同時に私は、さくらについていろいろ考え方を展開していく場合に、まず西伯町に住んでいらっしゃる皆さんが、「西伯町は住み心地がいいな」、あるいは「楽

しいところだな。夢のあるところだな」と思うような、そういう地域づくりをしていって、その上にさくらのイメージをどういうふうにつなげるか、ということだと思うのです。そのへんのところで、持田さん、産業課観光係長ということでございますから、町長さんになったつもりでお話していただきたいと思います。

〔西伯町・持田和史〕 西伯町は米子市から約12キロほど南に寄ったところでございます。通勤距離も約20分ほどで米子に出られるわけです。町も工場誘致などを積極的にやっておりますし、その中で「花いっぱい運動」、あるいは老人の花運動もやっているわけです。そういった中で、4月の上旬に咲くさくらにあわせて一式飾をやるわけです。

住みよい町ということとあわせて、心のなごやかな町ということで、さくらを増やしていきたいと考えているわけです。

〔安田 浄〕 それは緑水湖という湖を中心に、その周辺4キロぐらいにわたって、さくらだけでなく、ツツジやもみじも植えていきたい、ということですね。レイクサイドアリーナという総合運動公園があるということは、工場に勤めている方たちにも大いに利用してもらおうという意図があるのですね。

〔西伯町・持田和史〕 そうですね。これは野球場、テニス場なども完備しておりますし、勤めから夜に帰られても、夜間照明などもありますので、そうとう使えるという現状です。

〔安田 浄〕 余暇を、大いに西伯町で活用してもらおうということですね。勤める場所にもいいところだ、と思ってもらいたいということですね。

木次町の目次助役さんから、先ほど、やはりいろいろと展開していく場合にシンボルがほしい、と。そこで、「三冠王」というところもありましたが、こちらのほうはまさに「日本一のさくらのまちづくり」をやりたい、ということですね。

〔木次町・目次理雄〕 そうですね、私は大きなことを申し上げまして、「日本一」という言葉を使わせていただきました。昨年も、私のところの町長がご説明したと思いますが、今、数や質ではとうていかなうこないという認識はもっているのです。それは認めざるをえないと思っています。

今、5万本ということをお願いしましたが、植栽事業を盛んに進めているわけです。「数でかなわないのに、どうして植栽を」ということになると思いますが、植栽をすることによって、今、町民一人ひとりがさくらに寄せる心というか、いわゆる人間関係の育成というか——今は小・中学校のほうにもお願い申し上げて、勤労生産学習などの一つの手段としての植栽ならびに管理というものを通じて、「人間の心の豊かさ」をもって、日本一にできないものか、と感じているところでございます。

〔安田 浄〕 「さくら咲く健康のまちづくり」ということですね。とても大蔵省の造幣局のようなわけにはいかないけれども、土手の両側にトンネル形式で、少なくとも中国一を目指しているのですね。頑張ってください。

今度は川内町の大石助役さんにお伺いしたいのですが、何か、先ほどお話を伺っていると、針葉樹と山ざくらの戦いがあったのですね。戦前は山ざくらが山に見えた。非常に美しい風景だったが、戦後は針葉樹。この戦いは針葉樹が勝ってしまったのですか。

〔川内町・大石則之〕 はい、そうですね。全山が針葉樹に改良されてしまった。それがよかったか、悪かったか……。今は木材景気が悪いので、みんなも難儀しているのですが、広葉樹はほとんどなくなってしまったのです。

〔安田 浄〕 そこで、拠点づくりでさくらを集中的に植えよう、というご計画ですね。町民の皆さんのさくらに寄せる気持ちのようなものはどうですか。

〔川内町・大石則之〕 はい、みな関心はあります。拠点づくりと申しましたが、各地の神社仏閣とか、その他少しでも空間があれば、それぞれ婦人会や老人会に管理をしていたいております。したがって、老人クラブも「21世紀に向けて、わしらもやるんじゃ」ということで、それぞれ各地区でやっていたいでいるわけです。

〔安田 浄〕 続いて大村市の一ノ瀬さんにお伺いしたいのですが、ここで少し話題を変えたいと思います。先ほど来、やはりさくらの期間が1種類だけだと短いから、期間を長くしたい、と。高遠町でもそういうご計画があつて、そしてできるだけ長い間、さくらの開花を楽しんでいただこうということのようです。

大村市の場合には、お話を聞くと、3月20日から6月中頃までという、これはそうとうな幅ですよ。それで、オオムラザクラと、串間ざくらと、ヨシノザクラですか。うまくリレーができるのですか。

〔大村市・一ノ瀬 博〕 さくらだけで6月までではなくて、ヨシノが先に咲きまして、あとはオオムラザクラ、串間ざくらです。ヨシノが3月20日ぐらいに咲きますが、あとは八重ざくらが4月末、その後がツツジ、それから先ほども言いました西日本一を誇っております花しょうぶが最後近く、そして一番最後には、今、商工会議所の青年部で行っている花いっぱい運動で「あじさい基金」というものをつくり、あじさい公園をつくろうということになってますが、あじさいを最後に花いっぱいが続くわけです。

そういうことで長くなるのです。

〔安田 浄〕 高遠の町長さん、こちらはソメイヨシノの開花はいつ頃ですか。3月というわけにはいきませんか。

〔高遠町・北原三平〕 高遠は、高遠コヒガンですから、だいたい4月20日前後です。それが毎年、早くなったり、遅くなったりを繰り返しています。今年は早かったから、来年はきっと一週間遅れると思います。20日を中心にしてずれているのです。その前後に、何かいいものはないかと考えているのです。

〔安田 浄〕 今日はどうですか。だんだんと知恵は浮かんできましたか。

〔高遠町・北原三平〕 やはり今、大村市さんの話が現実的かなと思ってお聞きしました。しかし、今日も小林先生においでいただいているのですが、日本にはいろいろな種類のさくらがありますから、それをうまく組み合わせれば、高遠の場合は4月から6月初旬ぐらいまでは大丈夫だというご指導もいただいています。そのへんを目指したいと考えています。

〔安田 浄〕 先ほどから、さくらを包括して「花の会」ということがいわれております。だいたい、日本の場合には、さくらを昔から「はな」と言っていたようですから、大きく

包みこめばさくら以外の花も組み込んで、まさに花いっぱいの高遠町ということになるのでしょうか。

それでは北郷町の高橋町長さんにお伺いしたいと思います。冒頭で、高橋さんの町では、さくらとしては歴史が浅いということをおっしゃいました。だいたい皆さんのお話を聞きますと、城址であるとか、あるいは宗教的なものとか、比較的歴史があるのです。北郷町のほうで、さくらに目をつけられたというのは、どういうことからですか。

〔北郷町・高橋良則〕 私のところも山ざくらが非常に多いところでした。それが人工林がどんどん増えた。数千本の成木を切って、人工林に切り替えていったのです。今、残ったのは谷川の周辺とか、峻険な地帯の自然木林地帯には、まだかなりの山ざくらが残っています。

特に私のところは、山ざくらは2月頃から咲き始めます。そして非常に遅いものになりますと、板谷というところの奥のほうですが、その山ざくらはソメイヨシノが散った後に咲くものもあるのです。やはりそういうものに、今後は私どもも長い期間、取り組んでいきたいと思うのです。

今、私のところに残っているのは、2、3ヘクタールぐらいのところとか、7、8反程度のところ。その程度のものは集落的に残っていますが、一つの大きな公園という形ではほとんどない。

〔安田 浄〕 小林先生には、後ほどまとめのところで伺いたいと思いますので、いろいろとアドバイスをお願いします。

それからどこの市町村の場合でも、非常にさくらの本数を増やしたい、という大構想をそれぞれお持ちのようでございます。これはこれとして大変結構なことだと思います。高遠町では「さくら守」というのですか、岩崎さんと飯島さんというお二人の方がだいぶ頑張っておられましたけれども、やはりそうとう愛情を込めないとダメなのですね。その費用、人件費は、町でおもちになっているのですか。

〔高遠町・北原三平〕 入園料でまかなっています。

〔安田 浄〕 簡単ですね、話は。それで本当に、入園料でまかなえるんですか。

〔高遠町・北原三平〕 ええ、まかなえます。昔は全部、町費でまかっていたのです。それではやはり、いろいろと問題が出てくる。それで工夫しまして、昭和56年に入園料をちょうだいすることにしたのです。

大変心配したのですが、「こんな素晴らしい花を見せていただけるなら」ということで、皆さんころよく入園料を200円ずつ出してください。そのかわり、進徳館であるとか郷土館であるとか、絵島の囲屋敷であるとか、そういう施設もセットしました。全部共通で、さくらも見れるし、施設もご覧になれる。そういうことでやっておりますので、そこから管理する方の費用とか、あるいは肥料、消毒などをまかっています。

そして一番の問題は、一日に3万も4万もの人がおいでになると、ゴミの山になってしまうということです。ゴミ、尿尿、びん、缶……、それらの処理を業者委託をしまして、これに700～800万ぐらいかかる。すると業者は、総力をあげて、学生のアルバイトを大勢連れてきてまして、一日中たえず巡回させて、ゴミがたまらないうちにどんどん片づけている。だからあまりにもきれいで、来た人はゴミを置けないと言って、とても戸惑うのです。そのぐらい、何十人もでゴミ集めをします。

これをもし公費でまかなうとか、あるいはボランティアとかだと——昔はボランティアでやってもらったけれども——とても大変で、「朝の5時に集まってゴミ片づけてくれ」なんて言ったって、一日や二日はともかく、何回もでは、みんな来なくなってしまう。それで考えた末、そういうことになったのです。

先ほど来、お聞きしていると5万本、10万本ということですが、これは山ざくら系統の、丈夫な耐病性、耐虫性の強いものならいいけれども、ヨシノなどの弱いものをたくさん植えた時は、後の管理が大変です。高遠は1,500本のさくらを維持管理するのに、本当に四苦八苦して、今申し上げたような工夫をしてやっています。そのへんのノウハウがあったら、それを一番教えていただきたい。

今度、私どもは、さくらの丘公園をやるので今年は1,000本植えたのですが、これは24団体300人の方が参加して、植えていただいたのです。それはその皆さんが責任をもって将来も面倒をみていってくださるということで、やってもらっているのです。ただ、小・中学校の皆さんにやらせているのですが、あのように大きくなった時の管理がいったいできるのかどうか。

角館さんのように、見るものと作るもの、樺細工に使われる山ざくら系統のものなら別ですが、花を植えるのも、あまり本数を植えた場合は、あとがどうなるのか。そこいらを



見越しているのかどうか。この点を一つ、勉強させていただきたい。

〔安田 浄〕 今、高遠の町長さんから非常に大事なご発言がございました。本数を増やすのはいいけれども、樹木として強い樹種のものとはともかくとしても、そうではないものをたくさん量を増やしていくということは、将来の管理がなかなか大変だ、と。このへんのことは、後ほど小林先生にもアドバイスをいただきたいと考えております。

それではあと、物産化とイベント化というような具体的なところに入っていきたいと思います。やはり最初は角館町の鈴木さんに、もう一度、樺細工の話、その他にもなにかおやりになるのか。物産化ということに対してのお考えなりを、鈴木さんに皮切りでお話しただいて、そしてどなたかに物産化のことをお話しただこうと思います。

〔角館町・鈴木幸朗〕 そもそも山ざくら植栽が48年から始まったわけは、樺細工の原皮確保のためなのです。原皮が、現在、秋田県内にほとんどない状態で、岩手県、宮城県、福島県から買ってつくっている状態です。それで原皮確保のために、山ざくらを植栽しようということで、48年から始めましたけれども、これはだいたい30年ぐらいたたない

と原皮として使えないわけです。だから現在、まず今のところは植栽と保育をやっております。

あと、物産関係については、秋田県の物産展などにも積極的に参加しておりまして、観光課の職員が搬入の時に必ず一人行きまして、東京近辺は2泊3日、名古屋・北海道・大阪は3泊4日ということを手伝いに行っています。今度は逆に搬出する時には、町の物産協会のほうから行っております。

〔安田 浄〕 今日も休憩の時間に桜湯をいただいたのですが、あぁいったさくらにからんだ物産化をなさっているところは、どちらかございますか。ちょっと挙手をいただけたらと思います。

〔高遠町・北原三平〕 高遠は、商工会の婦人部の皆さんが大変にご苦労されて、やはり桜志津久、桜茶——このノウハウはなかなか教えてくれないらしいのです。それでも大変に熱心に取り組まれて、そしていちおう製品化いたしました。とても好評で、今日、原料が少なくて間に合いません。これからは、それをどうするか、工夫していかなければならないと思います。

それから、桜志津久をお粥に使いまして、桜粥というものを開発しております。桜粥も大変に好評を博しております。ただ、これを今は缶詰にして売り出しておりますけれども、それをお粥の状態ではなくて、ドライな乾燥したものにして、お湯をさせばおいしいお粥になるというようなことを、これからは工夫していかなければならないのではないかと、という感じがしております。

現実には物産化したものは、この二つであります。

〔安田 浄〕 おそらく物産化のことについては、後ほど、アドバイザーの玉井先生からもお話しいただきたいと思います。玉井先生は安曇野ワインなどを指導され、開発された方ですから、さくらにからんだ何らかの物産化に、示唆を与えられるのではないかと思います。明日のフォーラムもお楽しみにしていただきたいと思います。

次に、イベント化の問題について、今度はさくら前線同様に、南のほうから北のほうに上がってきてお話しいただきたいと思います。今日も高遠町からは、ミス・コヒガンザクラさんが参加されてますが、ひとことお願いします。高遠町におけるミス・コヒガンザク

ラ、イベントの代表でございます。お名前は中村美香さん。美しく香る、ちょうど高遠のコヒガンザクラのようでございます。どんなことをイベントの中ではなさいますか。

〔ミス・コヒガンザクラ〕 植樹会がありまして、その時に一緒に木を植えたり、あとはこの間も絵島まつりというのが夏にありまして、その時に一緒に大名行列のお姫さま役をしたり……。細かいことはいろいろとあるんですけども。

〔安田 浄〕 きれいなお姫さまになったでしょうね。盛大な拍手をどうぞ。高遠町に、こんな美人がいるという代表でございました。

高橋町長さん、イベントではさくらにからんでどんなことをやっておられるのか、ちょっとお話し願えればと思います。

〔北郷町・高橋良則〕 まだ私のところは木が小さいから、イベントやお祭の段階まで来ていません。温泉祭のほうは盛んにやっております。今度はリゾートで、2、3年したら、一番メインのところの整備が終わりますから、そうしたらさくら祭を大々的にやっていきたいと思います。

〔安田 浄〕 ではお隣の大村市の一ノ瀬さん、お願いいたします。

〔大村市・一ノ瀬 博〕 私どものところは、大村花まつりをやっております。その中で、私のほうでミスを3人——ミス・オオムラ、ミス・さくら、ミス花しょうぶの3人をそえまして、イベントの時には常にお手伝いしていただいています。花まつりの時期には、カラオケ大会、あるいは物産展、あるいは鯨太鼓とか、いろいろあります。また、市内の小中学生を交えまして、大村公園一帯をさくらマラソンという形で、マラソン大会をやっております。

他に年間イベントとしましては、納涼花火大会などいろいろとやっております。それに大村の場合は、先ほども申しましたように串間城址の中に昔から攻める時の命令に使う法螺貝を意味した石がございます。その石をくり抜いて吹いて伝えるのですが、それをもじりまして、「ほら吹き大会」というのをします。ちょうどさくらの時期の3月25日にやっているのですが、ほら吹き大会で大いにほらを吹いてもらっているわけです。

それから花の町のスケッチ大会。これは花しょうぶの時期に、市内の小学生を集めまして、スケッチ大会をやっております。それから今回からなんですが、多良岳の県立公園がございます。その県立公園でウォークラリーをします。これは先月の17日に行ったのですが、約150名程度の参加者で、かなりにぎわっておりました。

〔安田 浄〕 続いて、川内町の大石助役さん、お願いします。

〔川内町・大石則之〕 川内町は、まだ幼齢木でございますので、イベントはないわけですが、考えておりますのは、ちょうど開花期が4月の4、5日頃ですので、その時に「1万人の讃歌」ということで、盛り上がり、もう一度ふるさとを見直してもらおうということで、さくらを主体にした会をもちたいと考えております。讃歌というのは「讃える歌」と書きますが、また「参加する」という意味もございます。両方あわせまして、「1万人の讃歌」というイベントを考えているわけです。

もう一つは、まちおこしを中心にしまして、正岡子規の関係で俳句が非常に盛んでございますので、毎年いろいろな俳句会を催しております。今度は、さくらの下でひとつ俳句会をしようじゃないか、ということも考えています。

〔安田 浄〕 なるほど。いい俳句が出ますかね。私も実は、時間が余ったらと思って『歳時記』を開きまして、さくらに関する歌を拾ってみました、たくさんありますね。

さまざまのこと 思い出さくらかな (芭蕉)

きのう今日 高嶺のさくら見えにけり (蕪村)

はなの雲 鐘は上野か浅草か (芭蕉)

すずめ来て障子に動くはなの影 (漱石)

いろいろありますね。先ほど吉野町の辻助役さんからお話がありましたが、『万葉集』にはさくらの歌はきつと一首ぐらいですね。確かに『古今集』にはたくさんありますね。例えば、

しきしまの大和心を人問わば

朝日ににおう山ざくら花 (本居宣長)

世の中に絶えてさくらのなかりせば

春の心はのどけからまし (在原業平)

続いて今度は、木次町の目次助役さん。できればさくらにからんだイベントを中心にお願します。

〔木次町・目次理雄〕 さくらにからんだイベントと申しますと、どうしても開花時期になります。私どもは4月1日～20日頃までを、さくら祭の日と定めております。一番大きなものはこれですが、内容といたしましては、ご存知のとおり私どもは出雲神話の盛んなところですから、神話にちなんだ神代神楽というのが盛んでございます。だいたいこの期間中、街頭のいたるところで神代神楽が奉納されております。

それから民間放送局とのカラオケ大会とか、最近は大鼓による村おこしとかまちおこしが有名ですが、私どもも「斐伊川さくら太鼓」と名付けまして、昨年、本町出身の世良譲さんというジャズピアニストがいらっしゃいますが、この方が作曲をいたしました。ですから以前からあったような太鼓というイメージより、何かジャズバンドというイメージのものでございます。

それから開花時期に、斐伊川の土手を走る健康マラソンとか、あるいは町内大会の駅伝とか、郡内の町村対抗の駅伝などをやっております。

問題としては、開花時期をもう少し長くしたいということで、10種によって、これを1ヵ月半ぐらいまでにできたら伸ばしたいと、今、考えているところです。

〔安田 浄〕 西伯町の場合に印象に残っているのは、やはり一式飾ですね。こういうお祭が日本に二つしかないということですが、西伯町の町民の方々にはそうとう遊び心がありますね。先祖代々あるということでしょう。それで、今のイベントはどうですか。

〔西伯町・持田和史〕 一式飾は、4月の1日から25日までがだいたい花まつりなのですが、その中のイベントとして、一式飾や神幸式などに取り組んでいるわけです。

島根県の木次町さんもおられますが、山陰路観光キャンペーンというのが、鳥取・島根で行われているわけです。これは花の時期ではありませんが、7月15日から11月30日の間に、山陰の島根・鳥取両全町村でイベントを組んでいるのです。うちのほうでは、マラソンとか、法勝寺焼きというのがございますから、法勝寺焼きの窯元に行ってもらって、自分の手ひねりで瓦をつくっていただいたり、あるいは栗園がございますので、栗を拾っていただくというイベントも組んでおります。

冬には、かまくら祭なども組んでおりますので、米子などの近郊の方に主に来ていただくということでございます。

〔安田 浄〕 瀬戸町の松本町長さん。

〔瀬戸町・松本弘道〕 地区にやってもらっております。というのは、宗堂という場所です。宗堂桜祭ということで4月の中旬に——キリンビールの工場がありますので、そこタイアップして、宗堂桜祭がきたらバスが出て、キリンビールに行ってビールが飲み放題というイベントです。

〔安田 浄〕 すると町長さんも左団扇ではなくて、右団扇ですね。みんな、ビールを飲みに行きますか。

〔瀬戸町・松本弘道〕 はい。だから非常に多くて、コースとしましては、駅が二つありますので、二つの駅から宗堂桜の地域にバスが出るのです。そのバスが何十分かおきにキリンビールまで行けるようになっているのです。そしてキリンビールと万富駅というのは歩いていけるほど近いのです。だから、ビールが飲めるから来られるのか、さくらの花がきれいだからおいでになるのか、よくわかりませんが……。

〔安田 浄〕 それでは、吉野町の辻助役さん、お願いします。

〔吉野町・辻 健一〕 吉野町の行政としては、行事やイベントは何もやっていないのですが、吉野山に観光協会がございまして、そちらでやっておられると思います。例えば近鉄電車が入っておりますので、近鉄電車とタイアップして吉野山のPRをしようというイベントをやっております。

吉野山の関係では、観光講座というのを例年やっておりまして、全国各地から、吉野山に関心をもっている方々にお集まりいただきまして、吉野山の歴史を中心に講座を組んでおります。

それから、文化協会というのがございまして、花の下で茶会を開くというようなイベントもやっているようでございます。

〔安田 浄〕 では鬼石町の関口町長さん。

〔鬼石町・関口茂樹〕 私の町では、自然発生的なものだけですが、あと1年半後の開園にむけて、大勢の人に来ていただくようなものは桜山としてどういうものが一番いいのか、今、検討中です。

あえて申し上げますと、春には観桜会をやっております。冬は11月1日が桜山の山開き、12月1日を中心に桜山祭をやって、その間に撮影会などがありますが、まだまだ、大勢の人に来ていただけるようなイベントとは決して言えないものです。

〔安田 浄〕 いずれにしても、桜山森林公園というのは、先ほどもお話があった三波石とさくらという組み合わせで何か、いいイベントができればいいですね。町長さんが殿様か何かになったりしてね。

では次に、三春町の志田助役さんをお願いします。

〔三春町・志田 勉〕 うちのほうでは、観光協会と商工会が中心になりましてオシロ山滝桜を昼も夜も——夜は電飾で夜桜を見ていただいたり、通常の花見をやったりお酒を飲んだりということですが、平成5年にダム湖が完成します。滝桜も、このダムの周辺地区でございまして、ダム湖とさくらということで、何かイベントをやろうという企画があります。また野外音楽堂もできることになっております。

〔安田 浄〕 桜前線はいよいよ東北秋田県の角館町に到着いたしました。それでは鈴木さんをお願いいたします。

〔角館町・鈴木幸朗〕 うちのさくら祭は、だいたい4月25日頃から5月5日までの、ちょうどゴールデンウィークにかかる時期でございます。イベントとしては、武家屋敷と檜木内川堤のさくらが、ちょうど歩いて2分ぐらいの距離にあるものですから、その間に舞台を建てまして、郷土芸能の発表とか、武家屋敷でのお茶のサービス、それから樺細工伝承館で樺細工の展示会や書道展、それから檜木内川堤ではニジマス釣りなどをします。

それから檜木内川堤は、夜桜用に、夜は電飾いたしまして、武家屋敷は東北電力の協力で、武家屋敷のライトアップをお願いしてやっております。さくらに関してはその程度で

す。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

そして地元の高遠町では、先ほど伊東産業課長さんからご紹介がありましたように、ミス・コヒガンザクラの移植だとか、あるいはソバ食べ大会、饅頭食べ大会とか、さくら祭女王を招待したり、武者行列や大名行列をやったり、阿波踊りを招待したりというような、もろもろのイベントを開催中ということでございます。



提 言

〔安田 浄〕 それでは次に、アドバイザーの皆さん方から若干のコメントをいただきましたと存じます。信州大学教養部教授の玉井袈裟男先生、日本さくらの会の小林理事さん、長野県の地方課長の小熊さん、そしてぎょうせい中央研究所副所長の金井勝利さんというご順で、お願いしたいと思います。

〔信州大学教養部・玉井袈裟男〕 日本中のあちこちでさくらの里づくりにむけて、非常に情熱的にいろいろなことをなさっているお話を承りました。そして今、思い出すのは、昔、小学生の頃、先生に連れられて春の写生に行った時のことです。赤い色に白をまぜるとさくら色になる。クレヨンで描いていた時も、水彩画で描いていた時も、赤を塗って、そこに白を塗るとあらわれるさくら色に、「色はこれだ、春はこれだ」というような記憶が結びついているのです。

先ほど、CIということが言われました。コミュニティアイデンティティということですが、日本人なら誰でも、赤に白をまぜてさくらの花を描いた記憶があるのではないか。だからこれは日本人の共通のアイデンティティだろうと思うのです。

例えば、さくらの咲いている時期になって、みんながさくらのほうを向く。さあ、そこに拠点としてのさくら公園などがあると、それを中心にしてまちづくりや村づくりをやっていこう、という呼び掛けに対して、それに異を唱える人はほとんどいないようです。ですから1億円のうちの8,000万円を出してしまおうとか、私の住んでいる松本でも花づくりに何千万円か出してしまおうといっても、ほとんど誰も反対をしないで決まってしまうのではないかと思います。そして、人の心が一年に一ぺんだけ一つのところに向く、というものがさくらなら、そのさくら公園などをもつところは、そんな強みをもっているように思うのです。

昨年度も、いろいろなさくらがありましたので聞いてみますと、三春の滝桜、シダレザクラ、紅シダレ、それから鬼石の藤ザクラとか、あるいは宗堂桜とか、コヒガンザクラとか、いろいろなものがありますが、みなそれぞれ、その土地の風土というものを非常によ

く表現しているように思うのです。お隣の小林先生に伺いましたら、コヒガンザクラもないわけではないそうですが、高遠のように大輪に色濃く咲くというのは、やはり高遠のコヒガンザクラというべきであらう、と。そういうふうには、その風土ととてもよく合っているのではないか、ということが感じられるのです。

私は何年か前に、大阪の八尾というまちに、神立という小さな集落を訪れたことがあります。100戸ばかりの集落ですが、そこは徳川時代から切り花などをつくって、大阪市場に出して生計を立てていた花の村です。その神立に行きましたところ、神立の人たちは——高遠もそうですが——実に伊那谷のことをよく知っているのです。伊那谷を歩くと、河岸段丘のいたるところに山ざくらが咲いてる。あれだけ山ざくらがたくさんあるところを見ると、さくらが適するに違いない。そして伊那谷のいいさくらが咲いている神社とか仏閣を一つひとつ挙げるのです。もちろん高遠の話も出ました。

そしてその時に、神立では昔から、高野山系の斜面にさくらの木を植えて、その枝を切って、春早くそれをガラス室に入れて、蒸して、1月のうちに花を咲かせて、大阪市場に春の花として出すことをやっていたわけです。だんだん排気ガスがあがってきて、それもできなくなった。

紀州のほうからさくらをもってきて、そういうふうにはガラス室で蒸してみた。ところが紀州のほうは、暖かいところですから、早くにさくらの枝を切りますと、花が分化していない。ですから、ようやく咲かせてみたらみんな葉になってしまった、なんて喜劇があったのです。ところが信州というところは非常に標高が高いから、早く花の芽が分化する。だから早く切っても花が咲く。だから信州は、ぜひ大阪と提携して、あれだけ山ざくらが咲くのには適したところだから、さくらの下木をつくるのを手伝ってぐれないか、ということと言われたことがあります。その当時はまだ高度経済成長で、さくらの下木なんてことをやらなくてもすみましたが……。

先ほど、さくらの花で、人間の心をいやすまちづくりということと言われましたが、そちらのほうに移ってきた。それは春に一回、さくらが咲いた時にドッと押しかけて眺めに行くと同時に、しかし人間の心というのはもっと豊かさをもとめてやまないわけですから、例えばさくらに適するところでは、今、山は金にならなくて困っているという荒廃した森林にさくらの木を植えて、下木を出しても、これは一つの産業になるかなということを考えながら、風土というものの恵みを考えておりました。

いろいろなことがありますが、時間がございませんので、風土と産業とさくらというこ

とを、少し結びつけて考えてみました。

〔安田 浄〕 玉井先生、明日お話しくださる内容の予告をしてください。

〔玉井袈裟男〕 実は、私はさくらの花見はさくらの花だけではもったいないと思う。さくらというのは、人間の心を非常に高ぶらせ、沈んだ心をもちあげるがあります。それにあわせていろいろなことをやろう、と。

それからもう一つ忘れられないのは、さくらの葉というのは秋にもものすごくきれいな桜紅葉を見せてくれるのです。もみじといえば、かえでだと思っている。しかし、あの桜紅葉の時期に何ができるかな、ということを考えた。

私はたまたまワインをつくる仕事をしておりますが、さくらの実のワインをつくってあそこに飾ってあります。あれはまずくて飲めません。しかし、まずいということが判れば、それをどううまくつくればいいのかという工夫になります。

そんなことを話してみたいと思います。

〔安田 浄〕 今日以上の大勢の皆さんのご参加をご期待申し上げたいと思います。

続いては「日本さくらの会」の小林義雄理事にお願いしたいと思います。小林先生、だいぶお待たせいたしました。途中で、たぶんご発言をしたいというお気持ちもあったと思いますが、さくらを増やすこと、そしてそれを管理し、そして育成していくということなどについて、お願いしたいと思います。

〔日本さくらの会・小林義雄理事〕 只今まで、大変歴史的なさくらの町、あるいはこれから、そういうふうな素晴らしいさくらの歴史の町にしようと、ご努力なさっている皆さま方の話。いずれも名所づくりということにご熱心なお話でございまして、大変に感銘をうけたわけです。

ただ、さくらと申しますけれども、先ほども『万葉集』にさくらが載っているであろうかという話も出てきましたので、それにふれておきます。日本のさくらですから、その前から「さくら」という言葉はいろいろと取り沙汰されております。その中で、歌集の代表的なものは『万葉集』でございます。それにはもちろん出ております。

ただその当時は、中国からウメが舶来の佳木として入ってまいりまして、その当時の歌

をつくるような方々は、非常に舶来に対する関心が高かったために、『万葉集』には残念ながらウメのほうが多いです。約100余りです。ところがさくらのほうは40あまり。その当時は少ないですが、やはり昔からさくらはちゃんと載っております。

それが王朝時代の平安朝時代になりますと、先ほども『古今集』では、という話がありましたが、『古今和歌集』になりますと、がぜんこれが逆転してまいります。王朝文化はさくら文化という状態で、『古今和歌集』はウメのほうに逆に20ぐらいになってしまって、さくらは100ぐらいに増えております。したがって、さくらの名所づくりやお花見の歴史が古いわけでございます。

そういう中で、「さくら」と一口に申しますが、種類がたくさんございます。野性の代表的なものでは、約10ぐらいが数えられます。その中から、自然状態で100ぐらいの変種異種がございます。さらに奈良時代から、奈良の八重ざくらをはじめとして、室町時代の普賢象、それからさらに江戸時代になりますと、いろいろと園芸が発達しまして、たくさんの園芸品種ができて、現在に及んでおります。

北から南まで、それぞれ環境の違う町で、皆さま方はさくらの名所づくりをなさっているわけですが、林業のほうで「適地適木」という言葉がありますように、やはり適地を選んで、それに適したさくらの種類をお選びいただく。これが成功のもとであろうと思います。

種類につきましては、寒いところから暖かいところまでそれぞれございます。また肥沃なところ、排水のよいところとやや悪いところ、いろいろございますので、それに合わせたものを選ぶ。ところが、どうしてもこれは無理だなというところが、この頃は多くなりました。というのは、山よりになりますと杉や桧がだいたい植林されております。ところがあまり杉や桧が育たないようなところが空いています。ですから、まちづくりでそういうところにさくらを植えて、さくらをもっとたくさん増やしていきたいというようなお話をよく承ることがあります。

さくらは、私の今までの経験ですと、いわゆる果樹と思って取り扱っていただきたいと思います。果樹は花が咲いて、そして果実が成らなければ産業になりません。さくらの一般の概念は、花をみただけであとは放ったらかし、という例も今まではずいぶん各地に多くございました。ぜひ、十分に手のまわるだけの数と、それから将来立派な木が育つような土地にさくらを植えて、そして名所をおつくりいただいて、そして先ほどのさくら憲章にございましたような、十分な保育をしていただきたい。そのようなことがお願いでございます。

います。

〔安田 浄〕 さくらに対する愛情のこもったお言葉とアドバイスを、ありがとうございます。ありがとうございました。

今、お話がございましたけれども、何か『万葉集』に載っている数少ない代表作の石文が、高遠町にあるそうでございます。

桜花咲きかも散るとみるまでに

誰かもここにみえて散りゆく（柿本人麻呂）

というのがあろうございます。

今、小林先生がお話しになりましたが、つまり万葉の時には梅が多かった、というのは、中国の影響を非常に受けているんですね。そしていわゆる国際化時代から平安の頃になって、ナショナリズムが台頭してくる。そこでさくらが梅を圧倒する、というような知識を聞きかじっているのですが、これは正しいでしょうか。

〔小林義雄〕 それは本当だと思います。そういうことで、新田のさくらも最初は梅が植えられておりましたが、何回かの火災の後に、平安時代になりましてから、現在の山ざくらが植えられて、そして何回か植え継がれて、現在の山ざくらがあるわけでございます。そういう歴史がございます。

〔安田 浄〕 ありがとうございます。

それでは長野県地方課長の小熊博さんをお願いいたします。

〔長野県地方課・小熊博課長〕 お話を聞かせていただきまして、今日、お集まりの市や町の方を、非常にうらやましいなと思ったのが実感でございます。私も仕事柄、市町村長さんと話す機会は多いのですが、やはり一番の話は、地域づくりというのが、今一番、行政でやらなければならない話で、「魅力ある地域づくり」とかということをよく言うけれども、では実際に何をやったらいいかということがよくわからない——というのが本音のようでございます。そういう中で、今日お集まりの市や町の方の自信あるお話しぶりを聞いていると、それだけでも地域づくりに一歩先んじているなと感じました。

ふるさと創生の一億円というのは、正式名称は「自ら考え、自ら行う地域づくり事業」

というふうになっています。「自ら考え」というのが、そのポイントだといっています。今までの施策だと、国がつくった事業を、ある町でやってください、という発想でやっていたのですが、何をやるかどうかを自分たちから考えて、自分たちで行いなさい、というところが一番のキーポイントだったわけです。「自ら考え」という部分については、今日、お集まりの市と町の方は、もうすでに行っているということで、地域づくりを一步先んじているのではないかと。このあたりは、他の自治体の方が悩んでいることを尻目にして、すばらしいことではないかと思っております。

今日のさくらサミットに呼んでいただいた時、実は私は、非常に違和感をもっていたのです。というのは、「花」というものが、はたして正々堂々と大上段に話す時代になるのかな、ということを実は感じていたのです。これはおそらく、私が花との関わり合いが少なく、ちょっと女の子の気をひこうとしてプレゼントをすとか、その程度の花とのお付き合いしかなかったからだと思います。

今日の皆さんのお話を聞いていても、花のもつ美しさは、住んでいる人たちの心を豊かにする、そこまで深味があるものだなということを、お話を聞いていて感じたわけでございます。確かに、高遠町の町長さんも非常に温かな方で、これもおそらくさくらのなせる業ではないかと、今日は感じたわけです。先ほどのミス・コヒガンザクラさんも非常に美しく、会場にお集まりの女性の方も非常に温かな美しい方が多い。高遠町の名物は饅頭とさくらだけではなくて、美人も付け加えなければいけないのではないかと思います。

つまり行政の本当のメインのテーマに「花」がなるのかな、ということ、実は疑問に思っていたわけなんです。産業とかイベントとかといっても、それほど大きな広がりにつながらないのではないかと、実は思っていたのですが、今日、いくつか各自自治体で、それぞれアイデアと工夫をこらしていろいろな道があるのだという説明を受けまして、私も「花」というものを見直さなければいけないなと思いました。

実際、高遠の町に私も何回か来させていただいて、町の中を歩いてみますと、非常に明るいんですね。実は私は、来る前にいろいろとデータを見てみしたら、高遠町というのは、実は過疎の指定を受けております。過疎といいますと、何か非常に、人がどんどん出て行って、町の活力が低下して、暗いイメージがあったのですが、町をあるいてみると、そういう雰囲気全然感じられないのです。どちらかというとそうではなくて、もっと活気がみなぎって明るいという印象を受けたわけです。

今日のいろいろなお話を聞いてみると、その理由は、花を中心としたまちづくりをやっているということでしょう。公共施設にも花があります。道端にはコスモス——秋のさくらだということで、コスモスだそうです。そして一般のご家庭には芝ざくらも植えてある。本当に町全体がさくらをテーマに地域づくりをやっている。おそらくそのあたりが、明るいイメージの源ではないかと感じたところでございます。

行政だけではなくて、住んでいる人と力を合わせてやっていること、それがおそらく、この高遠町を明るくしているし、過疎らしくない高遠町になっているのではないかと思います。このことは、県内の他の市町村にとっても、本当に参考になることではないかと思えます。今後、市町村長さんとお会いする時には、そういう身近なところから一つひとつやっていくことが大事ではないか、特に自分たちが本当に自信をもっているもの、誇りをもてるもの、それをさらに伸ばしていく。そういうことが地域づくりの第一歩であり、地域づくりの王道ではないかということを、今日感じました。

今日、お集まりの自治体の皆さま方をお願いしたいのは、さくらは非常にパツと華やかに咲いて、パツと散るわけでございます。今日、皆さんがやっているお話は非常に華やかでございますけれども、散ることは、さくらを見習わないで、持続性をもってやっていただいて、長野県の他の市町村、ないしは全国の市町村の見本になっていただければと思っています。

〔安田 浄〕 どうもありがとうございました。

最後のアドバイザーは、ぎょうせい中央研究所の金井副所長さんをお願いしたいと思います。

〔ぎょうせい中央研究所・金井勝利副所長〕 今まで各自自治体の首長さんのご意見を伺いまして、第2回目のサミットが大変に内容の高いものになったのではないかと思います。今、県の地方課長の小熊さんから、率直なお話がございました。短く感想を述べさせていただきます。

一つは先ほど来出ていますCIの問題でございますが、いわゆる「コーポレート・アイデンティティ」「コミュニティ・アイデンティティ」ということを最近はまだ言っているようでございます。これはいわゆる色や形、あるいはデザインというものをいろいろ工夫していく、ということだけではないわけです。戦略性をもったCI——もう少しくだけて申し上げ

げますと、内を充実することによって、外の人たちをひきつける。自分たちが、自分たちの町や村を内から充実させていくことによって、外の人たちに魅力を感じさせる。そういうことを、全行政分野で検討していく、ということがCIの一番大事な部分ではないかと、私は理解しております。瀬戸町の町長さんのほうから、お話がございましたが、そういうことで瀬戸町においてもご検討されていると思います。

それから、今日の話の中で、いわゆる生活基盤整備、河川の改修事業であるとか、あるいは林道の開設事業、農業構造改善事業とか、そういう基礎的な部分がだいたい終わってきて、これからアメニティ——より快適な生活を住民がおくる、快適性を求めるということに、ようやく日本の国がなってきた、と私は認識しています。いわゆるクオリティ・オブ・ライフというか、今までとはちょっと違った、より自分の個性をいかした生活をしたい、特性をいかした生活をしたい、というところで、今日は各首長さんがいろいろな計画をお話しになったわけです。

今、問題になっておりますが、ベトナム難民が日本にどんどん来て、「金あまり日本」ということが言われている。そういうふうな金あまり、あるいは「金満国・日本」という、まさにこの時期に社会資本をストックしていかないといけないわけです。今日、ご出席になっておられる方は首長さんですから、ふるさと創生事業の来年度の概算要求の中で、そうとう各省庁は知恵をしばっていろいろなことを考えているようでございますから、積極的にそういうものを利用して、なんとかまちづくりに役立てていき、より快適な生活を住民が送れるようにご努力をいただければ、大変よろしいのではないかというふうに思います。

〔安田 浄〕 ありがとうございます。

今、長時間にわたりまして、ご出席の11の市と町の皆さま方に、いろいろと率直にお話を伺いました。考えてみると、さくらということにこだわった一つの展開をするということは、それぞれ地域は隔たっておりましても、何かライバルのような感じがするわけで、どこも同じになってしまったのでは意味がないのであります。できるだけ、さくらというものをテーマに据えても、創造性を発揮して、個性的な展開をはかっていただきたいということを、まず第一に考えました。

第二には、さくらを植えて、そして保育する。あるいは伝わってきているものを大切に育てていくということも、もちろん基本になりますが、できるだけさくらを核にして波及

効果の大きい展開を図る、というところに工夫をしていく必要があるのではないかと思います。

三つ目には、今の時代は「物から心へ」の時代だと言われております。つまり人間の心の安らぎのようなもの、あるいは潤いのようなものを、21世紀にむけてますます求めていくような時代だと考えます。この、さくらというものを核にして、そういう方向で行政展開を図っていただきための、一つのよりどころとして、さくらというものを考えてみたいかがだろうか。

それぞれ、アドバイザーの皆さま方のお話にもございましたけれども、私はこれから、やはり地域の住民の皆さまが、本当にその町や市に生活をしていて、暮らしやすい、快適で楽しい暮らしができる、そういうことをまず基本に据えて、そして私は、それが土壌づくりなのではないかと思うのです。その上に、立派なさくらという木を開花させていく。そういう視点での展開が必要ではないかと感じまして、簡単ですが、総括をさせていただきます。



さくらサミット憲章

〔安田 浄〕 それでは私のほうから、さくらサミット憲章の案を提示申し上げまして、ご賛成をいただければ（案）を削りたいと思います。お手元に印刷物があるかと思えます。

平成元年9月22日制定

「さくらによるまちづくり」を目指しているという目標をもつ縁で結ばれた全国の自治体は、相互の友好と親善を深めながら、豊かで魅力ある地域社会をつくるために、この憲章を定めます。

参考までに申しますと、第1条から第6条までございますけれども、それを英語で示してあるのは、その頭文字をとっていただくと「SAKURA」となっておりまして、これが原案をつくった方の苦心の表れということになります。

（Success＝成功）

第1条 今後ともさくらサミットを開催し、サミットとサミットに参加するそれぞれの自治体のまちづくりを成功するために、互いに取り組みを進めます。

（Approach＝接近）

第2条 「21世紀のまちづくり」という目標を限りなく実現に近づけるため、相互に連携、協力しあって花を咲かせることができるよう努めます。

（Keyword＝言葉）

第3条 まちづくりの共通標榜である「桜」をキーワードとして、「桜」に関する人や物の交流、情報の交換を行い、新しいまちづくりの手がかりを見い出します。

（Unity＝調和）

第4条 文化、教育、福祉、産業、観光そして災害対策などにおいて、相互の

連携、協力を取り、調和のとれたまちづくりを行うよう心がけます。

（Relation＝縁）

第5条 「桜」によって結ばれた縁を大切にし、互いに友好を深め、21世紀に向かって前進していきます。

（Agreement＝合意）

第6条 共通の目標に向け、ふれあいと連帯を築き、それぞれの自治体の進歩と住民の生活文化向上に努めることに合意します。

以上が「さくらサミット憲章（案）」でございます。ご出席の皆さま方にご賛同を拍手でいただきまして、これを憲章としたいと思います。

まことにありがとうございます。全員のご賛成でございました。「さくらサミット憲章」を制定させていただきましたことを、ここに確認申し上げたいと思います。

つづいてさくらサミットのシンボルマークについて、「ぎょうせい」のほうでお作りになりましたものを金井研究所副所長さんにご披露いただき、ご賛成いただきたいと思います。

〔金井勝利〕 今回で第2回目になるわけでございますが、ごらん「第2回さくらサミットin高遠」の左側にマークがございます。これから末永くサミットを継続して、その存在意義を確立するために、サミットのシンボルマークをデザインして決めておきたいと思っています。

このマークは、さくらの花びらを中央に置きまして、人をイメージ化しております。丸は地球を表しており、さくらを通して、国内はもとより世界の国々まで連帯・調和・協力をもとめて、ますます発展することをデザイン化したということでございます。

ご異議がなければ、これがさくらサミットのシンボルマークということで、来年以降も使用させていただこうと思います。いかがでしょうか。

「賛同の拍手」

どうもありがとうございました。

共同宣言

共同宣言

〔安田 浄〕 それでは、共同宣言について、高遠町町長さんからご提案がございます。朗読をしていただいて、拍手でご承認ということをお願いします。

〔高遠町・北原三平〕

さくらサミット共同宣言

秋田県角館町、福島県三春町、群馬県鬼石町、奈良県吉野町、岡山県瀬戸町、鳥取県西伯町、島根県木次町、愛媛県川内町、長崎県大村市、宮崎県北郷町、及び長野県高遠町の各首脳が、高遠町に一堂に会して、平成元年9月22日、第2回さくらサミットを開催しました。

この11市町は、「さくらによるまちづくり」をめざしている、という共通の目標をもつ縁で結ばれたきずなをもとに、相互の友好と親善を深め、人や文化、情報の交換を通して、個々の地域振興をより一層図ることに合意しました。

われわれは21世紀のまちづくりに向けて、互いに連携、協力しあって、花を咲かせることを、ここに宣言します。

平成元年9月22日

第2回さくらサミット

高遠町長・北原三平

〔安田 浄〕 それではもう一度、盛大な拍手をもって、この宣言を決定したいと思います。まことにありがとうございました。

続いて来年度の開催の自治体について、開会前にお打ち合わせを申し上げた結果、群馬県鬼石町の開催ということにご承認をいただきました。

それでは第3回の成功をお祈りします。どうもありがとうございました。

閉 ■ 会 ■ 挨拶 ■ 拶

高遠町長

北原三平

それでは閉会のご挨拶を申し上げます。

今日は1時から、5時40分過ぎまで4時間以上の長時間にわたるサミットが行われたわけでございます。本当にご苦勞さまでございました。今日は町長さんご自身、または市長・町長さんの代理の皆さま方にお集まりいただきまして、大変活発な、しかも大変有意義なご意見をいただきまして、まことにありがとうございました。安田先生の大変な名司会によりまして、また、玉井先生、小熊地方課長さん、小林先生、金井副所長さん、オブザーバーの先生方に適切なご助言をいただき、お蔭さまで今回のサミットも成功裡に幕を閉じることができました。

また、長時間にわたりまして、この討議を終始ご熱心にご聴講いただきました傍聴席の皆さま方に、心からお礼を申し上げる次第でございます。ありがとうございました。

先ほど高遠町の実践報告でお話し申し上げたわけですが、来年4月、花咲く19日と20日の2日間にわたりまして、「国際さくらシンポジウム」がこの高遠町で開催されます。高遠町と「日本花の会」の主催によりまして、長野県・自治省・外務省・建設省・農林省・文部省・日本さくらの会・国際花と緑の博覧会協会等々のご後援をいただきまして、開催されることになっております。どうか今日ご参会の皆さま方も、ぜひ全員、このシンポジウムにご出席くださいますようお願い申し上げます。

皆さま方におかれまして、本日のこのさくらサミットを契機といたしまして、また新たなチャレンジが始まることになろうかと存じますが、皆さま方、それぞれ燃えるような熱意の結集により、一步一步成功へと結びつけていかれることができれば、本サミットの開催地といたしましても、この上ない喜びでございます。

皆さま方のご協力に、深く感謝とお礼を申し上げ、本会のさらなる発展と、ご参会の皆さま方のいよいよのご多幸を心からご祈念を申し上げまして、閉会のごあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

プレス記事
紹介

高遠でさくらサミット

11自治体が参加

まちづくりへ共同宣言

憲章も制定

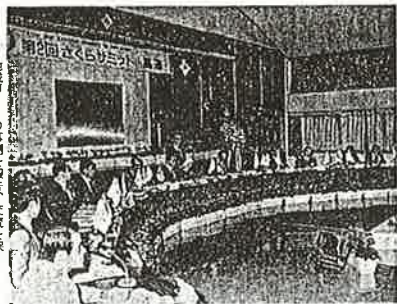
地域振興施策を模索

「さくらサミット」開催 高遠

第2回さくらサミットin高遠

全国11市町が一堂に

高遠で振興議論花ざかり



読売新聞
平成元年
9月23日付

南信日日新聞
平成元年
9月23日付

信濃毎日新聞
平成元年
9月23日付

朝日新聞
平成元年
9月23日付

全国11市町代表集い
なべらぎツアーズへ
さくらサミットin高遠
まちづくり共同宣言
憲章制定



第2回さくらサミットin高遠
「桜」によるまちづくりと地域活性化

発行日／平成元年9月

発行者／高遠町役場

ONISHI

MIHARU

SAIHAKU

KITAGOU

YOSHINO

SETO

OHMURA

KAKUNODATE

KISUKI

KAWAUCHI

TAKATOH